

見田宗介におけるマルクスの受容

慶應義塾大学環境情報学部環境情報学科 4年

学籍番号：7212548

氏名：田中雄太

概要

本論文では見田宗介におけるマルクスの受容を主題として設定し、その変遷を明らかにする。見田は多くの文献でマルクスの議論を言及しているものの、どのように受容されてきたかについて、これまでの先行研究では具体的に議論されてこなかった。

価値意識論では見田は功利主義への批判、欲求の「無限性」、価値の「外在性」という「3つの視点」からマルクスを引用し、考察をしている。ただこの時点では体系的な考察は行われていない(第4章)。

社会意識論では、前章の価値意識論における考察が引き継がれている。1つが「非本来的」な価値を追求する人々に対する否定的な考察、もう1つがマルクス由来の議論に「都市性」という視点が持ち込まれる点である。前者は「3つの視点」の内、功利主義的な批判の態度と欲求の「無限性」の統合の過程として、後者はその内、価値の「外在性」を問う考察の前景として捉えられる(第5章, 第6章)

『人間的解放の理論のために』などの文献では、サルトルの記述に影響されたマルクスの受容が見られる。特に「他者」と「希少性」、「まなざし」などの概念は価値の「外在性」の議論へとつながるサルトルの受容として考察できる(第7章)。

以上の考察を経たのちに書かれた存立構造論ではマルクスの受容にあたり2つの影響が考察できる。1つが第7章で確認したサルトルの受容の変化、もう1つが1960/70年代の日本で行われたマルクスの議論である。後者は廣松渉の物象化論が主である。この内容を踏まえながら見田はマルクスの文献についての体系的な考察を行い、自らの理論として主張した。また、存立構造論は価値意識論から展開されてきた「3つの視点」の統合の結果でもある(第8章)。

本論文は見田宗介におけるマルクスの受容という主題に答えるものであり、2つの結論が導かれる。1つ目には見田は初期の価値意識論からマルクスの考察を土台にし、存立構造論まで議論を展開してきたこと、2つ目には見田におけるマルクスの受容には、サルトルと日本のマルクス研究、この2つの立場からの影響が見られることである。展望では、存立構造論以降におけるマルクスの考察の応用について、仮説を提示した。

目次

第1章 問題の所在.....	- 4 -
第2章 先行研究の検討.....	- 5 -
第3章 本研究の主題.....	- 7 -
第4章 価値意識論におけるマルクスの受容.....	- 8 -
第1節 功利主義への批判.....	- 9 -
第2節 欲求の「無限性」.....	- 10 -
第3節 価値の「外在性」.....	- 13 -
第4節 章のまとめ.....	- 15 -
第5章 社会意識論におけるマルクスの受容—「非本来的」な価値の追求—.....	- 16 -
第1節 地位・学歴の志向.....	- 17 -
第2節 「不幸」と「疎外」.....	- 18 -
第3節 「非本来的」な価値の追求.....	- 20 -
第4節 章のまとめ.....	- 24 -
第6章 社会意識論におけるマルクスの受容—「都市」という議論—.....	- 26 -
第1節 憧れの形成.....	- 26 -
第2節 「まなざし」としての「都市」.....	- 28 -
第3節 章のまとめ.....	- 31 -
第7章 サルトルを介したマルクスの受容.....	- 33 -
第1節 「他者」の導入.....	- 33 -
第2節 「希少性」という議論.....	- 36 -
第3節 章のまとめ.....	- 39 -
第8章 存立構造論におけるマルクスの受容.....	- 41 -
第1節 日本におけるマルクス受容.....	- 41 -
第2節 廣松渉の影響.....	- 42 -
第3節 サルトルの影響.....	- 45 -
第4節 「3つの視点」の統合.....	- 49 -
第5節 章のまとめ.....	- 54 -
第9章 見田は何を論じたかったのか.....	- 55 -
第10章 結論・今後の展望.....	- 56 -

第1章 問題の所在

本論文では見田宗介におけるマルクスの受容について、その理論的構成を明かすことを目的として設定する。見田宗介は日本の社会学者であり、佐藤の整理によれば「見田宗介」は彼の文献自体が1つの「テーマ」であるという。「テーマ別研究動向（見田宗介＝真木悠介）」で見られるよう、すでに多くの研究者によって彼自身が主題として設定され、複数の視点から研究が行われてきた（佐藤 2022）。その中には個別の文献を対象に行われたものだけではなく、横断的な研究を行ったものも見られる。見田の研究を「社会構想の社会学」として捉えた上で、テキスト内在的な研究を行った徳宮のもの（徳宮 2022）や、見田のライフヒストリーを踏まえながら複数の文献を時系列順に論じた佐藤による研究（佐藤 2020）などはその例である。

その中でも本論文では、見田におけるマルクスの受容を主題として設定した学説研究を行う。見田は修士論文である『価値意識の理論 欲望と道德の社会学』¹の時点ですでにマルクスについて複数回言及を行いながら考察をしており（見田 1966a）、初めての投稿論文として記録されている「純粹戦后派の意識構造」においてもマルクスの用語として知られる「疎外」を用いながら自身の考察を行っている（見田 1960）。そして、本論文で示されるように、多数の文献の中でマルクスは援用され、論じられてきた。その内容はマルクスの理論を援用して社会的な現象を考察したものや、マルクスにおける著作自体の理論的な考察、見田独自の視点で解釈されたマルクス由来の概念の提示など多岐にわたる。

そこでここでは見田において理論の展開の中でどのようにマルクスが受容されてきたかを明かすことを目的として設定する。

¹ 以下では『価値意識の理論』として記述する

第2章 先行研究の検討

見田におけるマルクス受容についての研究は、主にマルクスからの影響を論じた考察とマルクス由来の概念として知られる「疎外」をその対象とした考察の2つに大別することができる。

マルクスからの影響を論じた考察については主に『存立構造』に対象を絞ったものが多く見られる。『存立構造』について、『資本論』と『弁証法的理性批判』と並べて存立構造論であると言及したもの(船橋 1982 : 175)やマルクスにおける弁証法的社会科学が「近代社会の存立構造の把握であり、同時に、近代社会科学の存立基礎をイデオロギー批判的に解明する概念である」(田島 1987 : 91)と論じた上で、同様な目的を持った文献として『存立構造』を挙げたものや、マルクスの原典に対する深い理解を基礎として、さらにそのうえに、たんなるマルクス解釈にとどまらない著者自身の独自の構想を提示していると主張したもの(小林 1983 : 286)などは、単純にマルクスの議論との関連性を示した先行研究として挙げられる。また、第8章第1節で詳しく論ずるが、日本のマルクス論の影響を考察したもの(井上 1985a; 井上 1987; 副田 1998; 小野寺 2014)も多く上げられる。

他にも『人間解放の理論のために』については見田の議論は「マルクスの交通様式の原型にもかかわっていると見られる」(越智 1972 : 25)と考察したものや、授業研究の視点から「人間解放の理論のために」の議論を引いて、「欲求の対立ののぞましい「統一の原理」」(小川 1973 : 8)についての考察を行っているものも見られる。ここではマルクスと見田が共通して労働を契機とすることで「類的存在」を獲得する視点への批判が行われた(小川 1973 : 9-10)。

このようなものが見田へのマルクスの影響を考察した先行研究として挙げられるが、確認できる通り、いずれも文献を絞った考察に限られており、体系的にマルクスの受容を考察した研究は見られない。

また、見田における「疎外」もすでに複数の研究者によっても考察されてきた。内田は、見田における存立構造論を取り上げながら、それを疎外＝物象化論的な社会的事実の分析であると考察している(内田, 隆 三 1980)。長谷は、近代日本における流行歌を社会意識の視点から調査した見田の『近代日本の心情の歴史』を、人々の感情の変化における「疎外」の視点から捉え直した。ここでのある時期の「心情」は権力、近代化からの「疎外」として捉えられることが主張されている(長谷 2016)。小形は見田の「まなざしの地獄」と同時期に発表された『人間解放の理論のために』や、他の多くの著作には、共通した「疎外論的構図」があることを主張している(小形 2016)。小形によれば「疎外」は人間が社会に規定される存在であることを示す枠組みであり、人間が生み出したは

ずの〈外〉が人間の手を離れ、人々を拘束する情況が「疎外」であるという。矢守ほかは、ある地域の活性化におけるスローガンを見田の疎外論に基づいて考察した（矢守・李 2018）。そこでは見田の「貨幣への疎外」の議論を参照しながら、見田の疎外論が解釈されている。奥村は「まなざしの地獄」において、都市におけるまなざしもよって、都市が求める姿に人々が同化されるメカニズムとそのメカニズムが自由意志を通じて N・N を殺害へと至らせる情況を「疎外」であると考察した（奥村 2016）。呉は真木における時間における「疎外」を「普遍抽象的で不可逆的な時間表象」として考察した上で、その代替となる時間モデルをエマニュエル・レヴィナスの議論に即して示している（呉 2021）。

ただ、これらのいずれも見田における「疎外」の体系的な研究としては不十分であることを主張する。上記の先行研究では、それぞれの文献における「疎外」がどのような意味を持った用語なのか、どのような学者に依拠して書かれた用語なのか、また他の見田の著作における「疎外」とはどのような関係を持つのかなどについては明確に示されていないためである。瑣末な指摘にも思えるが重要な点である。というのも、見田における「疎外」は文献によっては、どのような意味のもと用いられているか不明瞭な用語である。見田は一部の文献では、「疎外」について過去の学者の文献を参照しながら考察を行っている。ただ、ヘーゲルやフョイエルバッハを引用したもの（見田 1966a）や、マルクスやサルトル（真木 1977）を引用したものなど、それぞれの文献でそれぞれの学者の「疎外」概念を参照していることが見られる。そのために、「疎外」という同じ表記を用いていても、実際に同じ内容を論じているかは検証が必要である。加えて、参考文献を設けることなく「疎外」について言及した文献も見られる。したがって、これまで複数の研究者によって行われた「疎外」に関する考察は、見田における「疎外」の考察としては不十分、もしくは誤った援用となっていることが示唆される。そのため見田における「疎外」の理論的な構成を明かすことが目的である場合、複数の文献を対象にした上で、それぞれの文献で「疎外」を言及した際に参考にした学者から影響についての考察を行わなければならない。

このように見田とマルクスの関係については体系的な考察こそ行われてこなかったものの、様々な側面から指摘が行われてきた。

第3章 本研究の主題

そこで本論文では、「見田宗介におけるマルクスの受容」を主題として設定した上で、その理論的な構成を示すことを目的とした学説研究を行う。ここではその主題に答えるために、仮説を「見田におけるマルクスの受容は価値意識論における考察を問題関心としながら、サルトル、および、日本のマルクス研究を応用して、存立構造論の中で明確な変化を見せた」と設定する。

このように仮説を設定した理由については、『価値意識の理論』を構成する「価値意識論」が今後研究を行うための「基礎的な作業」であったことが本人によって言及されているためである。見田における「価値意識論」はそのほとんどが『価値意識の理論』においてまとめられており、これは本人によって今後の研究のための「基礎的な作業」（見田 1966a : 2）であると言及されている。この価値意識論の重要性については、鈴木(2016)においても主張されている。鈴木は『価値意識の理論』は見田にとって研究の基礎となる仕事であり、真木名義の本にも通づる原動的な動機に基づいて書かれた書籍であること主張している（鈴木、洋 仁 2015 : 220）。若林は「社会心理学、存立構造論、比較社会学、現代社会論と、見田の研究、著作」は一貫した志向のもと書かれていると主張している（若林 2023）。飯田は「いわゆる「社会学原論」のような著作はないが、多数の論考の基礎には原理的思惟が見田のなかにはあると推察される」（飯田 2014 : 163）と記述している。このことに従えば、見田における価値意識論は、その後の見田の文献を対象にした考察を行う上では参照されるべき書籍である。これは「疎外」に主題を設定した学説研究である本論文においても例外ではない。

この論文において示される結果の意義については、以下のようなものが挙げられる。

1つはこの研究自体が見田宗介における体系的な学説研究であることである。先行研究の検討でも確認した通り、見田宗介を主題とした研究には特定のテキストを対象としたものや時期を絞った研究が多く、複数のテキストを対象とした上で体系的な整理を行った研究は多く見られない。ただ、本研究は学説研究としての立場をとりながら、見田における文献を対象とした研究を行う。そのために、社会学における研究としては一定の意義が認められる。これは見田の学説研究を行うこと自体に意義が認められている前提において示される主張である。

第4章 価値意識論におけるマルクスの受容

まずは価値意識論におけるマルクスの受容を確認する。

そもそも価値意識論についてだが、見田宗介による価値意識論は、現代社会学における「人間の幸福」や「善」、そして行為を方向づける内的な要因を探求する一環として展開されたものである。この理論は、個人の行為や社会の構造における価値意識を理解するための包括的な視座を提供し、行為の主観的側面とそれを規定する客観的条件を結びつけるものとして位置づけられている。見田の価値意識論は、「価値意識」という概念を中心に据え、これを個人のパーソナリティ構造や社会構造と関連づけて分析する立場をとっている。

見田における価値とは本人によって「主体の欲求を満たす客体の性能」、と定義されており、この価値に対して「個々の主体が多くの客体に対して持つ価値判断の総体」として価値意識が設定されている。この見田の価値の定義における特徴は、価値を「主体の欲求」と「客体の性能」の関係から示すことで、価値が本質的に主観的であると同時に客観的でもあるという二重の性質を持つことを示している点である（福留 2018a）。この定義が行為や文化、社会のさまざまなレベルでの価値意識の役割を考察するための基盤として設定された。さらに、見田は価値について、自己の欲求を短期的に満たす「快」価値と長期的に満たす「利」価値、他者や社会の欲求を短期的に満たす「愛」価値と長期的に満たす「正」価値として、4つに類型化している。この類型化により、価値がどのように行為や社会的関係を形成し、規定するかを分析可能にしている。また、見田は価値意識が個人だけでなく、文化や社会構造によっても形成され、変化していくことを指摘している。見田はこの、修士論文である『価値意識の理論』の冒頭で自らにとっての価値意識論を構成することが今後、近代日本研究を行うにあたっての「基礎的な作業」であったことが本人によって言及されており、この価値意識論の重要性については、鈴木（2015）においても主張されている。鈴木は『価値意識の理論』は見田にとって研究の基礎となる仕事であり、真木名義の本にも通づる原動的な動機に基づいて書かれた書籍であること主張している（鈴木、洋仁 2015：220）。若林においても「社会心理学、存立構造論、比較社会学、現代社会論と、見田の研究、著作」（若林 2023）は一貫した志向のもと書かれていると主張していることが主張されていることから確認できる。他にも、飯田は「いわゆる「社会学原論」のような著作はないが、多数の論考の基礎には原理的思惟が見田のなかにはあると推察される」（飯田 2014：163）と記述している。このことに従えば、見田における価値意識論はその後の過程を見る上で重要な文献であることが主張される。また、先に取り上げた「主体の欲求を満たす客体の性能」という定義自体も、福留（2018b）の考察によれば、マルクスの価値概念と密接に結びついている。この価値の定義は、マルクス

『資本論』第1章に見られる「商品の価値は素材的な富のすべての要素にたいするその商品の引力の程度を表わしている」(Marx・Engels 1867 /1967: 234) という記述と共通する側面を持つことが福留 (2018b) によって考察されているためである。価値を単に商品経済の外部にある抽象的な概念ではなく、主体に依存しつつも客体の属性として捉える姿勢は、両者に共通だといえる。この主張はマルクスの価値形態論における「商品の価値対象性」が、単なる物質的属性ではなく「社会的関係」によって規定されるという洞察と対応して論ずることができる。特に、マルクスが「諸商品の価値対象性は、これらの物の純粹に『社会的な定在』としてのみ表現される」(Marx・Engels 1867 /1967: 126) と述べる箇所は、価値が主観と客観の両者の間で生まれるものであるという考察と一致している。福留はマルクスの『資本論』における価値の概念の比較対象として見田の価値の定義を引用したまだが、その内容に一致が見られるという指摘が行われた点は今回の議論において重要である。見田における価値の定義にもマルクスの受容は見られるのである。

以上のようにマルクスの受容について考察を行う。この内容は主に三つのテーマに分けることができる。1つ目は、功利主義的に批判的な態度、2つ目は欲求の「無限性」についての議論、そして3つ目は価値の「外在性」を問う議論である。ここではその3つの内容を「3つの視点」として以降の章に引き継ぐ内容として整理する。

第1節 功利主義への批判

1つ目は功利主義に批判的な態度である。『価値意識の理論』の序章「人間科学の根本問題」において、「自然科学とは区別される「人間の科学」」(見田 1966a : 3) において追求されるべき問題には、人間における「目的」や「善」、「生き甲斐」などの言葉で表されるような、それぞれの行為の動機それ自体を指す「問題追求型」的な関心が存在するべきであり、この対象として示される「方法追求型」はその上で示されるべき課題であることがしめされている。そこで提示されるのが上記の提示におけるさまざまな価値への「問題追求」を行う「価値意識論」であるわけだが、その重要性として示されるのが、対比される「方法追求型」な関心への批判である。ここではマルクスを引用しながら、「方法追求型」の例として功利主義的な立場に見られる「人間の普遍的欲求」を前提とした議論について、それが「価値意識の無反省な反映にすぎない」(見田 1966a : 12) だと批判を行なっている²。ここではマルクスにおける資本論を引用しながら、功利主義的な人間

² 「合理的道徳論・科学的人生観の探求は、功利主義の原則によって理解されるのがふつうであった。ところが功用の体系は手段の体系であって、究極目的のものについては何もいうことができない(中略)。「人間性の普遍的要求」とは、個々の功利主義者の歴史的・社会的・文化的に制約された価値意識の無反省な反映にすぎないのがふつうであった」(見田 1966a : 13)

像を前提とする合理的道徳論や経験的科学的視点を批判しているとまとめられている。

「観念的衝動力を認めていることが不徹底なのではなく、さらに突っ込んで、この衝動力を動かしている原因を究めない点が不徹底なのである」（見田 1966a : 12）。この『価値意識の理論』の中で展開される問題意識は、マルクスにおける批判と同様に対応している。マルクスにおける批判は『資本論』の中で、資本の弾力性についての議論の中で提出された。産み出された資本を一定の割合で追加資本として投下することを前提としている立場への批判である（Marx・Engels 1867 /1969: 306）。このような立場の具体的な例としてベンサムを取り上げながら、彼らが、典型的であることを理由に、人間の本性を前提とする立場であると批判した。その点から見ると、見田は価値追求そのものの批判としてマルクスを援用して功利主義的な立場への批判を行なっている限りであり、マルクスの議論自体は、見田の議論の中に組み込まれた様子は見られない、功利主義的な立場を否定しようとする態度のみである。このような主張は行為の価値意識の基準において〈目的〉そのものの形成を特定の形で無批判に前提する議論への批判を行う際にもマルクスが援用されており（見田 1963a : 51）、行為選択を行う際の「未来」への志向において、一定の要因のあり方を前提とした立場として批判している。このように、見田宗介は価値意識論における一定の意義とそれに相対する立場への批判を、マルクスにおける記述を援用しながら主張を行なっている。

第2節 欲求の「無限性」

2つ目は欲求の「無限性」についてである。これは『価値意識の理論』の中の「三章 パーソナリティに論における〈価値〉 第三節 価値意識の形成」と「文化の理論における〈価値〉 第四節 文化における価値変容」などに見られる議論から示される。ここで示される「欲求」については『価値意識の理論』の中で、それぞれ「道徳的・芸術的・社会的欲求をふくむあらゆる分野において、あるものを「のぞましい」とする傾向のすべて」（見田 1966a : 17）と、見田自身の記述から定義されており、この内容は上記で取り上げた、価値意識論全体にまたがる「主体の欲求を満たす客体の性能」（見田 1966a : 17）として示される「価値」そのもの定義に接続している。

このような欲求の「無限性」についてはパーソナリティにおける欲求性向が変化する過程で見られる「機能的自立」の議論の取り上げられている。人間の欲求にはそれ自体に変化や発展が伴うわけだが、それらは歴史的にも個人の発達史的な側面からも把握される。その内に挙げられているのが「機能的自立」、「もともと何らかの具体的な欲求を充足する手段としてその価値を意識せられた金銭（あるいは権力、あるいは名声）が、やがて自己目的的につい有されるにいたるという現象」（見田 1966a : 113）と記されるような変

化の過程である。そこで発生するのがマルクスの受容として示される人間における欲求の「無限性」である。

見田はこの議論について、哲学ないし社会思想の歴史の中で3つの異なった視点が取られてきたことを指摘する。1つ目は「人間的欲求の無限性を何らかのより高次の規範によって制御され、あるいは超越されるべき悪として人間の「煩惱」の源泉として捉えるもの」（見田 1966a : 115）、2つ目は「欲求の無限性を同様に人間の不幸の原因として見るものであるが、第一の観点とは逆に一定の歴史的社会的産物として捉えるものである。例えば、商品生産、ことに貨幣経済の発達に人間の欲求をその現実的基盤から切り離し、価値は交換価値として抽象され、一般化される。抽象化され一般化された欲求はもはや満足ということを知らない」（見田 1966a : 115）と捉えるもの、そして3つ目が「第一、第二の観点と逆に、欲求の無限性を人間の無限の発展の原動力として肯定的にとらえるものである。」（見田 1966a : 115）。

このうち、2つ目と3つ目の視点においてマルクスからの影響を見ることができる。先に3つ目の視点について確認すると、社会の理想像を支えるための立場としてこの視点を持った人物として、マルクスの名前が挙げられているが、この主張の具体的な内容については明確ではない。ただ、内容を見る限りでは「価値」そのものの新たな創造の可能性をとるものとして、弁証法的な立場をとるマルクスを指しているものと思われる。

そして2つ目の視点については、「交換価値」の自己目的化として捉えられている。ここで「マルクスのいう「交換価値の殉教者」たち」（見田 1966a : 115）と例が挙げられているが典拠は示されていない。ただ、これは『経済学批判』に「交換価値の殉教者」

(Marx 1858 /1995: 172) たちとして同句が用いられていることから、そこからの典拠を持つ記述であると考察できる。ここでいう「交換価値の殉教者」とは、蓄蔵貨幣を追求する貨幣蓄蔵者が、交換価値そのものを目的化するあまり、使用価値を犠牲にしながら社会的富としての貨幣に執着する姿を説明している。蓄蔵貨幣は流通から引き上げられながらも「流通への復帰の方向性」を持ち続けている。そのため、貨幣の独立性を保つ役割を果たす中で貨幣蓄蔵者は富を具体的な使用価値ではなくなり、抽象的な社会的象徴として固定化する。その無限の交換の過程が、資本主義のもとでの富の抽象化と貨幣の象徴性を体現している。この内容から見れば、ここでいう「交換価値の殉教者」はあくまで貨幣蓄蔵者に見られる「蓄蔵すること」において、貨幣への欲求への比喩であると考察できる。

このマルクスの主張が、見田における「無限性」の議論の中で提示されている貨幣そのものの欲求が極度な「交換価値」を持つことによって自己目的化される、という議論と一致する。

さらにこの「自己目的化」の内容は「文化の理論における〈価値〉 第四節 文化における価値変容」の2, 〈目的と手段〉における議論へと展開される。ここでは「欲求」を達成するための価値の体系についての考察が行われおり、そこで「手段の目的への転化」、そして「目的の手段への転化」が挙げられている。行為の基準からみた目的と手段はどちらも行為に準じて位置付けることができるが、一方が他方に転化する際は、別の作用が働いている。

手段が目的へと転化する場合は、価値意識が規範として内在化し、行為を促進する能力が強化される、と見田によって説明される。この現象は道徳的価値の発展に見られるように、元来功利的な意味を持っていた価値が「定言命法」として自己目的化することで成立する。

その一方で、目的が手段に転化する場合は、元来自立的であった目的が高次の目的に従属する手段として再定義されることによって発生する。この過程は行為の正当化や内的葛藤の処理において重要な役割を果たすという。特に社会的に承認されない行為が、承認される規範によって正当化される場合や、個々の行為が高次の理念に関連づけられる場合、この転化が機能する（見田 1966a 129-34）。

このような形で示される目的と手段の関係は、先の「無限性」の議論と対応する。「交換価値の殉教者」における貨幣蓄蔵者の行動は、手段として示される交換価値そのものを目的化する過程として示されており、これは手段が自己目的化する現象の一例でもある。蓄蔵貨幣の追求において使用価値が犠牲にされ、貨幣が抽象的な概念であるにもかかわらず欲求されるということは、貨幣という手段が自己目的化し、その価値を独立して発散する段階に至る過程を表していると表現し直すことができる。

ここで特徴的なのは、これらの一連の内容が交換価値としての貨幣の追求として考察の範囲止めていない点である。具体的にはこの無限性の欲求の基礎となる手段的な価値として金銭的価値以外の概念も取り上げている。それが、「あるいは権力、あるいは名声」（見田 1966a : 113）や、手段から目的の転化として生じるのが「実体的な価値客体にかぎらない。それはまた不特定の目的のために使用される機能それ自体、すなわち能力であることもある。知能（「頭のよさ」）や知識は一つの例であり、権力や名声・人気・信用などは他の例である」（見田 1966a : 132）と主張している点である。これらの内容は、議論の骨組みとしてはここまでで確認した通り、マルクスの議論に従っているが、名声や人気、信用などを交換価値の一形態として取り上げたのは、見田宗介において独自の点である。

第3節 価値の「外在性」

3つ目が価値の「外在性」についての問いである。価値の外在性についての問題は、「第四章 文化の理論における〈価値〉 序節 パーソナリティ論と文化の理論——価値意識の底にあるもの」のなかで、価値がどのように個々人の具体的な欲求から独立し、社会的・客観的な体系として「外在化」し得るのか、そしてその過程でどのようなメカニズムが働くのかを問う内容として「価値の〈外在性〉の問題」という題目で見田によって設定されている。はじめに、カントやデュルケーム、ジンメルなど議論を引き継いだ、ブーグレにおける「価値は命令的であるがゆえに客観的であり、集合的であるがゆえに命令的である」という主張を引用している。ここでは価値が人々の努力を引きつける動的な力であると説明と確認している。ただ、見田によれば、この議論からは価値が「外在的」なものとして抑圧を生む要因が説明できないという。そしてその説明として、価値の外在性を強調しすぎると、今度は個人の主体性が無視され価値が神秘化される危険性がある。このような内容を整理すると、つまり、価値は人間の現実的な欲求から形成されるはずであるにも関わらず、結果として価値は独立した体系として成立しているように見える、ということである。この問いは、単に外在性そのものの前提をおくことでは、説明を終えたことにならない。

では価値が外在性を帯びるとはどのような説明のもと成り立つのか。その問いこそがここでいう価値の「外在性」についての問いである。ここではそのメカニズムとして、個々の欲求が一般利害に結晶化する過程、文化的伝統による変容、価値の体系化が挙げられるが、これらの詳細な解明には、「価値のこのような〈外在化〉および〈物神化〉のメカニズムこそが追求されなければならない」と述べられた上で、これ以上の考察は行われていない（見田 1966a : 185-6）ここで用いられる「物神化」は別のページでマルクス由来のものとして用いられている³ことから、ここでの価値の「外在性」についての問いは社会における価値の「物神化」のメカニズムとして問われるべき、マルクスに通じる内容であることが考察できる。

また、価値の外在性についての問いは「生産様式と価値意識論」でも整理されている。ここでは価値意識が社会的存在、特に生産様式や階級構造によってどのように規定されるかが論じられる。「社会的存在が社会的意識を規定する」というマルクスの主張を基に、特定の生産様式がその社会の成員に共通する価値意識を形成する過程が考察されている。

³ 「「無階級社会」というものがいつの日にか可能であって、そこではやがて、これらの現象（価値の物神化など）は清滅するにちがいないという史的唯物論の仮説を前提するものである。さきに引用したマルクスの言葉にも示されるように、未来の無階級社会においては、価値意識の根元的な転換があるものと期待されている。」（見田 1966a 272）

たとえば封建社会では、伝統や権威への服従が支配的な価値意識として存在したように、生産様式は人々の価値意識に直接的な影響を与えるという。また、支配階級が自らの利益を守るために価値観を規範として押し付けるプロセスも指摘されており、この影響が社会全体の価値体系に広がることが示されている。さらに、価値意識は単なる個別の思想ではなく、支配的道德と被支配者のホンネの間で二重性を持つ構造として表出し、これが階級社会における価値意識の特徴を成している。

このような価値の「外在性」についての議論は「物神性」とも深く結びきながら論じられている。階級社会においては、価値体系が支配階級の利益に基づくものとして成立し、それが普遍的で客観的な、疑い得ないものとして提示される結果、人々にとってよそよそしく、時に抑圧的な存在として現れる。この「物神性」は、人々の欲求や幸福に根ざしていないがゆえに、合理的に理解されることなく、形式的な「至上命令」として受け入れられる性質を持つ。このような価値の「外在性」と「物神性」についての議論は、見田によって「徹底的な考察が要求」（見田 1966a : 84）されると言及されており「文化の理論」にもこの内容は同じ文章で記述されている（見田 1965a）。ただ、ここまでの時点では、その重要性が強調され続ける限りであり、価値の「外在性」について、一定の解答を提出したとは言えない。

これらの内容について、引用を行った文献の整理を行えば以下のようなになる。価値意識論で引用を行ったマルクスの文献としては『ドイツイデオロギー』、『共産党宣言』、『経済学批判』、『資本論』の4つが挙げられる。ここで指摘されることは、文献が限定的であるという点である。マルクスの議論を主題として設定していない以上当然の内容だが、この指摘は見田のマルクス受容について考察を行う上では重要な点である。というのも、価値意識論の段階で、参考文献が限られていることは、見田の恣意性だけに要因が求められるものではなく、当時のマルクスが著者の文献の発行が今日から見てまだ少なかった、点から主張できるためである。例えば、マルクス『経済・哲学草稿』の和訳や、マルクス、エンゲルス全集として知られるMEGAは見田が価値意識論を執筆・発行した段階では発行されておらず、今日の日本におけるマルクス理解からは異なる前提に立つ必要がある。ただ、上記の文献は、価値意識論以降の存立構造論の段階では発行しており、その点において見田におけるマルクス受容は自身の読み込みだけではなく、日本におけるマルクス文献の出版の状況との前後関係も影響するものとして考察できる。この内容は第8章に引き継ぐ。

第4節 章のまとめ

価値意識論におけるマルクスの受容については、上記のように、「3つの視点」に分類した上で考察を行った。1つ目は、功利主義への批判的態度として、である。見田は「普遍的欲求」を無批判に前提とする功利主義を目的そのものの形成を問わない点から批判を行い、マルクスの資本論を引用してその限界を指摘した。2つ目は欲求の「無限性」についてである。見田は貨幣や権力などの手段的価値が自己目的化する「機能的自立」の過程を挙げ、資本主義が欲求の拡大をどのように促進するかを論じた。そして3つ目は、価値の「外在性」の問いについてである。価値が具体的な欲求から切り離され、社会的・客観的な体系として成立する過程について、生産様式や階級構造が価値意識をどのように規定するかを示す必要性を主張した。

ただ、ここで示される3つの受容のあり方は、それぞれ価値意識論の中で論じられた議論ではあるものの相互の連関は見られない。内容の整理のためにこれらの3つの議論を本論文では「3つの視点」として整理する。

ここまでで確認されている通り、見田の価値意識論において、マルクスはいくつかの分類項目を以って自身の議論の中で援用されているが、それ自身が見田の主張に直接紐づいている様子は見られない。そのため、この時点では見田宗介の文献において見田自身がどのようにマルクスの議論を受容したのかについては、考察を行うことができない。そこで次章では、価値意識論ののちに見田が取り組んだとされる社会意識論における研究を対象として考察を行う。そこで、見田がどのようにマルクスを受容し、また自身の主張の内容に引き継いだのかについて、考察を行う。

第5章 社会意識論におけるマルクスの受容—「非本来的」な価値の追求—

社会意識を主題として設定した論文は数多く挙げられる。ここでは主に対象となる論文を2つの種類に区分した上で考察を行う。1つは、社会意識論の中でも「価値」をその議論の中心に置いた文献、そしてもう1つは「都市」を中心に置いたものである。どちらも人々の「欲求」の対象を論ずる主題としながら、その説明について、異なる解答を提出している。

本章で確認されるのは、ここでいう「非本来的」な概念として提示される幾つかの価値について、見田が一貫した態度から考察を行っている点である。何が「非本来的」なのかといえば、価値意識論における、文化における価値変容の過程の中で示された手段の自己目的化の議論が該当する。

手段の自己目的化の観点から、資本主義社会の貨幣追求を分析したのがアダム・スミスやマルクスである。このようにして「購買のための販売」($W-G-W'$)は「販売のための購買」($G-W-G'$)に意味転換して、貨幣的富の無限の追求が開始される。(見田 1966a : 249)

これは『資本論』において、貨幣の資本への転化の応用として示される。

売るために買うこと、またはもっと完全にいえば、より高く売るために買うこと、 $G-W-G'$ は、資本の一種、すなわち、商人資本に特有の形態であるにすぎないように見える。しかし、産業資本もまた貨幣であって、これは商品に転化され、また商品の販売によって、より多くの貨幣に再転化される。およそ買いと売りとの間で、流通部面の外部に行なわれる行為は、運動のこの形態に少しも変えるところはない。最後に、利子付資本においては、流通 $G-W-G'$ 、は、簡略化されて、媒介のない流通の結果として、いわば簡潔文体で、 $G-G'$ 、として表わされる。すなわち、より多くの貨幣に等しい貨幣であり、自分自身より大いなる価値だというのである。こうして、事実上 $G-W-G'$ 、は、直接に流通部面に現われる資本の一般定式である (Marx・Engels 1867 /1969: 271)。

この内容は第4章の整理に従えば、欲求の「無限性」に該当する議論であることがわかる。先の価値意識論の中では考察の中での一説として取り上げられたものに過ぎず具体的な考察が行われていなかった。ただ、これに関連した議論は以降の社会意識論では多く取り扱われる。

第1節 地位・学歴の志向

例えば、「高校生の現代職業観」（見田 1967）の中では、価値意識の「非本来的」転倒が、学歴追求という形で顕在化している。ここで示されるのは、資本主義社会における「手段の自己目的化」の議論と軸を同一にするものであり、貨幣追求の無限性と同様に、学歴が「価値そのもの」として追求される状況である。具体的に言えば、進学組の高校生たちは、大学入学が自己の生き方や欲望を実現するための手段ではなく、それ自体が独立した目的として価値を持つと信じていることが提示された上で、大学進学が「選択の幅を広げる」という幻想が自己目的であることが見田によって考察されている。この内容が「社会的価値」として貨幣の無限増殖が認識される議論と重なる。貨幣が商品交換の手段（ $W-G-W'$ ）から自己増殖の目的（ $G-W-G'$ ）へと転化するように、学歴もまた「自己実現の手段」としてではなく、「社会的競争を勝ち抜くための普遍的価値」として独立して追求されるものとして認識される。見田は貨幣と学歴を、並列に捉えているのである。これは先に確認した、価値の「無限性」の議論において地位すらも同様に交換価値として成立すると論じたものの応用の例であると言えるだろう。

他にも「現代欲望論--幸福の背理」（結城 1969）では以下のように考察されている。

けれども地位という魅力の本質は、これらの価値の一つ一つにあるのではなく、むしろそれらの漠然たる複合体にあるのだろう。この点地位という価値は、貨幣という価値に似ている。貨幣元来それ自体としてはほとんどいかなる人間的欲望をも充足させないが、それがさまざまに多様な人間的欲望の充足の手段として機能しうるがゆえに、あたかもそれ自体に自立した価値があるかのごとくに見えてくる。このように多義的な目的の手段となる価値が自立して自己目的化するカニズムを、ブークレはポリアリズムと名づけているが、ポリテリズムの機制によって地位は一つの自己目的化した価値となる。したがって一つをとった場合に、質的な保障とか人間関係とか創造的な仕事とか、それら本来の欲望と矛盾するような場合にも、人間は地位を選ぶのである。（結城 1969：283）

このように、「現代欲望論-幸福の背理」でも、見田が貨幣における価値の自己目的化を地位という概念に結びつけて論じている点が確認できる。貨幣が自己増殖の手段として独立した価値を持つように、地位もまた、人間的欲望を媒介する価値として自立し、自己目的化していくのである。このように、見田の幾つかの議論の中では、貨幣と地位、学歴はマルクスにおいて示される $G-W-G'$ の図式のメカニズムにおいて同様な価値として捉えられていることが示される。ここで確認されるのは、貨幣学歴、地位といった価値が、人

間的な生の本質的欲望を媒介する手段としての性格を失い、独立した「目的」として追求されるといふ「非本来的」な価値への転倒の過程である。

「欲求の解放とコミュニケーション」（見田 1973a）でも同様の考察は行われている。

近代の実践理性の要請としての「神」（プロテスタンティズム！）であれ、その不全なる等価としての天皇（立身出世主義で！）あれ、またはむき出しの富や権力が名聲（各種アニマル！）であれ、心貧しき近代人の生の意味への感覚を外部から支えようとするこれらは一切の価値形態は精神が明晰であればあるほど、それ自体の根拠への問いにさらされざるを得ず（見田 1973a：19）

第2節 「不幸」と「疎外」

これらは他の文献でも一貫した立場を取り続けている。1963年に発表された「現代における不幸の諸類型：疎外（日常性）の底にあるもの」⁴では、見田は「疎外」に対して、以下のような考察を行っている。この論文では、現代社会における「不幸」のさまざまな形態を手掛かりとして、人間の「自己疎外」を分析し、その背景にある社会的構造と因果連関を明らかにすることを目的としている。その「不幸」を探るために、見田は「疎外」を単なる主観的な感覚として捉えるのではなく、社会的生産手段の私的占有などに基づく客観的な状況として位置づけ、その現象が日常生活にどのように影響を及ぼしているのかを解明しようと試みている。

ここで見田が示す「疎外」は、「人間の日々の関心が、非本来的な価値にとらわれている状態」（pp.21-22）として定義されている。この内容はまさに本説でここまで見的内容と同様な社会現象である。ただし、見田は「疎外」と「不幸」を区別しつつ、その関連性を論じている。上記の定義のように「疎外」は人間の意識を超えた客観的な状況であり、反対に「不幸」はその主観的な帰結として現れるものである（pp.21-22）。つまり、孤独や不安、倦怠などの「不幸」は「疎外」の現象形態ではあるが、その現象は状況としての「疎外」と必ずしも一致するものではない。「疎外」された状況下でも「不幸」でない状態、つまり「安固と快適」を見出す人々が存在するのである。このことを見田は認めつつも、その幸福は根源的な人間の欲求を満たさず、内面的な不安や倦怠に脅かされる逆説的な性格を持つと指摘している（見田 1963b：23）。これも同様に交換価値的な「殉職者」として示された内容と同様である。

⁴ 以下「不幸の諸類型」として記述する

そのような考察の中で見田は日本における「不幸」を「疎外」の観点から考察するにあたって、四つの誤ったアプローチを避けるべきだと述べている⁵。

現代日本社会における疎外状況のさまざまな現象を分析するにあたって、私はとくに、つぎのような四つの誤った取扱い方をさげたいと考えてきた。(1)疎外の問題を、そのさまざまな日常的・個別的な現象形態そのものの中に解消し、その背後にある普通的・本質的な事態との連関を追求しない現象論的なアプローチ。(2)疎外の一般的な概念規定や、その思想史的な位置づけに関する思弁的な考察のみに終始して、その具体的・個別的な現象形態を素通りしてしまう本質論的なアプローチ。(3)疎外を人間の孤独や不安や倦怠や、総じて疎外「感」の問題だけに解してしまう主観主義的なアプローチ。(4)疎外を搾取や抑圧や第化過程と同一視して、意識形態のレベルにおける疎外概念の独自の意義を認めない客観主義的なアプローチ(中略)。疎外状況の「本質的な事態」「客観的な根元」とはいうまでもなく、社会的生産手段の私的占有による、生産主体の社会的生産手段からの疎外であり、その結果生産主体が逆に、生産手段の手段として働くことによってしか、自己の生活を実現しえないという事態である(見田 1963b : 69)。

以上の『現代日本の精神構造』における「不幸の諸類型」における議論であるわけだが、これは『価値意識の理論』で提示されたマルクスの議論の間と、いくつかの共通点が見られる。まず、『価値意識の理論』では、価値意識の基盤となる「問題追求型」の関心が強調されており、功利主義的な「方法適用型」の限界が批判されていることを確認した。見田は、「普遍的欲求」を前提とした議論を「価値意識の無反省な反映にすぎない」(見田 1966: 12)と指摘し、人間の行為や欲求を規定する価値のあり方そのものを問い直す必要性をマルクスの議論を引用しながら考察している。

この視点は、「不幸の諸類型」における「非本来的な価値」に対する批判と共通している。「非本来的な価値」とは、人間の創造力や労働力の産物であるが、外的でよそよそしいものとして固定化される価値基準を指す(見田 1963b : 71)、たとえば、戦前の「ひと財産」とされた金額や、天皇制の価値体系が歴史的变化の中で虚無化する事例が「不幸の諸類型」の中では挙げられており、これらの価値の崩壊がいかにも「砂上の楼閣」としてむなしいものであるかが論じられている。この批判は、価値に対する社会的条件への依存

⁵ 引用の中で指摘される「本質論的なアプローチ」への批判はのちに見田によって書かれた「〈ふつうの古典〉としての『資本論』」(見田 1991)でも同様な指摘が行われている。見田はこの文献の中で『資本論』に対して「人間中心的な偏見」(見田 1991 : 39)があることを批判した。

を認識した上で、その背後にある因果連関を再考する必要がある点において共通している。

2つ目に両者に共通するのは、「疎外」の克服を目指す主体形成の問題である。「不幸の諸類型」では、「疎外状況を克服するための主体的なエネルギー」をどこに見出すべきかが問われ、その基盤として「普遍的・本来的な価値の生産・創造」に携わることの重要性が強調されている（見田 1963b : 71）。一方で、『価値意識の理論』でも、「未来」への志向性が「疎外」の克服において重要であることが論じられ、特定の価値体系に依存しない行為の基準を模索する姿勢が示されている（見田 1963a: 51）。いずれの議論においても、「疎外」状況の克服は単なる制度改革や外的な条件の変更にとどまらず、人間の主体性や創造性の再構築に基づく内的な変革を伴うべきだという点で一致している。

先の章で確認した通り、価値意識論において提示されたマルクスの受容は、功利主義批判、欲求の無限性、価値の外在性という「三つの視点」に集約されるが、これらは個別的に論じられるのみで有機的な統合には至らなかった。だが、「不幸の諸類型」では、一定の進展が見られる。それは、欲求の「無限性」と功利主義的な態度への批判という、価値意識論では直接結びついていなかった「3つの視点」のうちの2つの内容が関連して論じられている点にある。

第3節 「非本来的」な価値の追求

このような傾向は他の論文にも見られる。

見田において最初に投稿された論文として記録されている「純粋戦后派の意識構造」では、マルクスの用語として知られる「疎外」を用いて考察が行われたが、この内容も価値意識論と「不幸の諸類型」と同様の主張が見られる。この論文では、戦後日本における「純粋戦后派」と呼ばれる世代の社会意識の特徴を、戦前世代との比較を通じて明らかにしようと試みている。見田はこの世代を「実感主義」という言葉で特徴づけ、その二面性に注目する⁶。

見田は文中で、彼らが戦前の世代のように価値観を外部から強制されることなく、自らの主体性を形成する機会を得た点を評価するが、その形成された主体性が「よい学校」「よい成績」「立派な会社」や「立派な地位」といった、一般的には称賛されるような外的な価値に依存する傾向があることを指摘している。これが、彼が論ずるところの二面

⁶ 「実感主義」とは横尾の議論に従えば、戦後日本において戦争体験や価値転換の混乱を背景に、抽象的理論やイデオロギーへの反発として提起された、具体的体験を基盤とする価値観や行動原理を指す。戦後派の主体性構築において、生活の中で共有される感覚や価値意識を媒介に、新たな社会像や連帯を模索する姿勢が特徴的であり、抽象的な理論の批判にとどまらず、行動と記録を通じて理論化を図ることで社会全体に接続可能な方向性を見出そうとすることを主張している。（横尾 2010）

性である。この見田の「俗物的な価値」への評価は価値への両儀的な側面を持つものとして捉えられよう。

見田は、この外的な価値への依存を「疎外された精神状況」（見田 1960：52）として位置づけている。加えてこの「疎外」には、引用にある「次カラ次ヘト仕事ニ追ワレル」という表現はから、目的が見えない日々の忙しさや、社会が押し付ける期待に対する個人の苦悩も内包させながら考察を行っている。これらは人々にとって主体性が失われ、自らの人生を他者の基準や社会的評価によって定義する状況を反映している。

この内容はマルクスの「疎外」に近いものとして考察することができる。そして、ここで特に重要なのは見田が外的価値への依存を、「俗物的」として、表現している点である。「次カラ次ヘト仕事ニ追ワレル」というような労働環境において示される状況はマルクスにおいても見られるような「疎外」を示す状況である。ただ、見田はそれに加えて「よい学校」「よい成績」「立派な会社」や「立派な地位」といった価値に依存する状況においても「疎外」を見出している。この両方が見田において、「疎外」のあり方として考察されている。のちに考察を行うが、ここでの表現を用いれば「俗物的な価値への傾斜」として示されるような、一般的には「良い」とされる「価値」と欲求の一致については、見田において批判的に考察されている。

「貧困の中の繁栄」（見田 1963c）もこのような議論を汲む論文の1つである。「貧困の中の繁栄」では、「貧困」と「繁栄」という一見矛盾する概念を組み合わせた現象を、実業家の自伝や身の上相談の事例を通じて考察している。見田は、経済的成功の中に内在する精神的な「貧困」を、「生き甲斐」や「幸福」といった人間の根本的な価値に焦点を当てながら明らかにする⁷。見田が描く「成功者」は、経済的富の獲得を人生の目標として全エネルギーを注ぎ、合理的な意思力でその目的を達成しているが、その過程には深刻な犠牲が伴う。見田は、こうした成功が、人間としての感受性や人間同士の細やかな愛情を失わせる要因になっていると指摘する。というのもすべての価値が経済的富という目標のもとに目的合理的に組織され、その結果として、主体の内部が「貧困の論理」によって支配されていくためである。富を得た後も、彼らの「生き甲斐」は貧困から条件づけられた欲望に従属し続け、成功者でありながらも内面的には「貧困の支配下」にあるとされる。さらに見田は、成功者に限らず、一般の人々の生活の中にも同様の構造を見出している。身の上相談の事例では、「榮譽」や「地位」への執着が描かれ、それらを手に入れるため

⁷ 「生き甲斐」を主題にしたものは「〈人生観〉の社会学」（見田 1966b）、「何に生きがいを感じるか--1 仕事,2 ホーム,3 レジャー」（見田 1971）。また、これらの「生きがい」についての議論が、のちのサルトルにおける「相乗性」の議論へと接続されていることの指摘は片上（2016：117）によって行われている。

に自らを官僚的な機構の中に「部品」としてはめ込む行為が指摘される。この「部品」としての役割を果たすことで得られる幸福は、一見して安定的で満足感をもたらすように見えるが、見田はこれを「幸福」のみすぼらしさや「うらがえしの不幸」として批判的に描写している。こうした生活の目標が外的な必要性によって規定され、自らの人生がそれらのための「手段」としてのみ考えられるようになる結果、主体的で内発的な目標設計の能力が失われてしまうことと考察している。また、見田はこうした状況が単に外部からの強制によるものではなく、主体が自己を規格品として標準化しようとする内面化された罪悪感とも深く関係していることを指摘している。「自分が未だ十分に規格品でないことに対する罪悪感」という表現に象徴されるように、人々は外的価値の達成を目指しながら、その達成ができない自分に対して自己否定的な感情を抱く。この矛盾の中で彼らは日々の生活に埋没し、次第に自らの人生が自分自身のものでなくなっていくという状況が描かれている。見田は、これらの事例を通じて、「貧困からの解放」が単に物質的な所有や経済的な豊かさを達成するだけでは実現し得ないことを示していた。

この内容は先の「不幸の諸類型」にも似た事例が見られる。「不幸の諸類型」における事例8では、現代日本社会における「非本来的な価値」に囚われた人物を「階級構造が「開かれて」おり、支配階級に仲間入りするチャンスが万人に与えられているという神話が、体制の一元的な価値の基準を疑いかえす覇気と視点を、若者たちから奪い去ってしまう」と考察している（見田 1963b : 46）。ここで地位という価値が一元的なものであると捉える視点は、貨幣論が象徴するマルクス由来の価値の議論に連動していて、地位を「一般価値形態」として見るという発想であると考へる。地位は貨幣のように「物財」と交換されるわけではないものの、多種多様な「価値」や「利益」と交換しうる一般価値形態として機能する。

具体的には、地位が高いほど人間関係を有利に組織する権限や、仕事上の裁量、他者からの尊敬や影響力などの「資源」を入手しやすくなるため、事実上「地位」という一点を通じて多様な便益を交換することが可能になる。つまり地位は社会的場面における「交換の等価物」として浸透しており、手段としてははずだった地位が自立化し、あたかも「地位そのもの」を追うことが究極のゴールであるかのように変質するのである。こうして地位が本来の「創造的な仕事を実現する手段」や「社会に貢献するための拠点」といった意味づけを外れて、人間の欲望を束ねる「一般価値形態」に転じ、自己目的化しやすい構造が生まれている。

このような議論が、人びとの活動や人生設計を、あたかも「地位を自己増殖させること」そのものに向かわせるという点で、貨幣の自立化（G - W - G'）と同型の作用を果たしているのである。実際、地位を追い求める欲求は単に、「目先の昇進」や「肩書き」

への執着という次元を超えて、一元的な評価軸の下で人間同士が優劣を競い合う構造を生み出す。見田はこの状況を「不幸の諸類型」の一例として批判的に描写している。他の著作を読み並べれば、地位という価値が貨幣同様に「非本来的」な目的へと変質してしまうというメカニズムが、マルクスの価値理論を応用したものである、と結論づけることができる。

『明治大正期の身上相談』では、明治から昭和初期にかけて日本の新聞や雑誌で展開された「身上相談」を通じて、個人の悩みとそれに対する回答を分析し、当時の社会規範や個人の主体性の在り方が考察されている。特に、家制度や家父長制といった明治期の価値規範がどのようにして個人の判断や行動を制約し、主体的な意思決定の場を狭めていたのかが示されている。これらの分析を通じて、社会的秩序の維持と個人との相互関係が浮き彫りにされている。明治期の身上相談における回答は、一貫して「厳風美俗」や家制度の維持を基盤とし、社会的安定や既存の秩序を優先する価値観が反映されていると見田によって考察されている。たとえば、妻子ある男性と関係を持った女性に対して、「父上のため」や「先方の家庭のために早く切った方が良い」といった回答がなされ、相談者の主体的な意思や感情は軽視されていた。こうした外的価値規範への従属は、従わない場合に「罪悪感」や「社会的非難」といった内面的な影響を相談者に与えた点で、個人の選択を強く制約している。さらに、「生命は人間として正しく無い」という表現は、行動の正当性を社会規範の遵守に求め、これに反する選択が個人の存在そのものを否定するような重圧を与えているというのである。これらの議論に見られる特徴、「純粹戦后派の意識構造」や「貧困の中の繁栄」で議論された「外的価値への依存」の問題と繋げて論ずることができる。たとえば、「純粹戦后派の意識構造」では、「良い学校」や「立派な地位」といった外的価値に依存する主体性の欠如が問題視されているが、明治期の身上相談においても、家制度を基盤とする価値規範への依存が相談者の判断を強く制約している。また、「貧困の中の繁栄」における「幸福のみすぼらしさ」と同様、外的価値を追求することで内面的な充実を犠牲にする過程が、「疎外」の構造として明確に示されている。

「日本人の理想的人物」（見田 1964）でも、戦後日本における価値観や人生観の変遷を統計データと調査をもとに分析した論文であり、特に「理想的人物像」と「生き甲斐」を対象に、社会の変化が個人に与える影響を考察している。この論文では、労働や家庭といった日常生活の具体的な領域に価値を見出す傾向が主流化する一方で、その背景にある社会的構造や精神的な状況に対する批判が展開されている。ここでは「生き甲斐なし」と回答する人々の増加や、大衆社会化の進行が生む「即自的」の感覚が重要な議題となっている。生き甲斐観について、論文は職業や社会階層による特徴の違いを示している。旧中

間層や労働者層は、具体的な仕事や生産活動を通じて充実感を得る傾向があるが、一方で農民層では、苛酷な労働環境や機械化による伝統的労働様式の崩壊が、それを阻害する要因であるという。特に、農民層の「働く喜び」の喪失は、意識の変化が進行している兆候とされる。ホワイトカラー層ではさらに深刻であり、記号的で抽象的な労働の性質が、仕事への情熱を奪い、組織内での孤立や非合理的な人間関係の複雑さが、仕事を「他者の目的」のための活動へと変えている。論文ではまた、家庭生活に生き甲斐を見出す傾向が強調される一方で、それが個人の満足にとどまることで、「生きること自体の目的化」に転じていると指摘される。これは、生産活動や広い社会的関心を失い、日常生活に価値を見出そうとする現代日本人の姿を象徴している。同時に、こうした生活の中で、仕事や家庭に価値を見出せなくなった場合に、「生き甲斐なし」として現れる虚無感や、日常的な営みの中に閉じ込められた状態が問題視される。

この状況を「疎外」の観点から整理すれば、「日本人の理想的人物」における生き甲斐観の分析は、見田の他の議論と多くの接点を持つことが分かる。本論文では、大衆社会化の進展が生む「即目的」的な生き方が指摘されているが、これは、「貧困の中の繁栄」において示された経済的成功や物質的所有への過剰な依存と同様の構造を持つ。特に、日常生活や家庭に価値を見出す傾向が広まる中で、その背景には、社会的な圧力や機械的な労働環境によって奪われた労働の創造性や喜びがある。例えば、農民層における伝統的労働様式の破壊や、ホワイトカラー層における仕事の「部品化」は、個人が労働を自らの目的として主体的に取り組むことを阻害している。これにより、労働が本来持つべき自己実現の契機が失われ、他者の目的のために生きる状態が固定化されている。さらに、こうした「疎外」の過程は、生き甲斐を見失った人々の増加にも繋がっている。論文中に示される「生き甲斐なし」の回答や、消費の場に幸福の源泉を見出す傾向は、社会的な生産や共同体的な価値からの断絶を象徴している。これは、「純粹戦后派の意識構造」で論じられた「俗物的な価値」への依存とも共通し、個人が外的価値の追求に没頭する一方で、内面的な豊かさや主体性を喪失していく様を明らかにしている。

第4節 章のまとめ

本章では、社会意識論の枠組みでマルクスを受容する際、「非本来的」な価値の追求をどのように捉えたかを中心に考察した。ここで示される内容は、資本主義における貨幣の無限追求から始まる「手段の自己目的化」に関する議論であり、マルクスが提示した「W-G-W'」から「G-W-G'」への転化を、学歴や地位などの社会意識の具体的領域に適用する形で見田が論じている点が特徴的である。これは価値意識論における「3つの視

点」，すなわち功利主義への批判的な態度と欲求の「無限性」の二つを統合しつつ，価値の「外在性」の問題へも接続しうる観点として提示されている。

具体的には，学歴や地位が当初は自己実現のための単なる「手段」にすぎないにもかかわらず，いつの間にかそれ自体が社会的に評価されるための「目的」へと変質し，過剰に増殖されていく過程が「非本来的」な価値の追求として扱われる。この「非本来的」価値の自己目的化が進むほど，人々は競争や比較の渦中に巻き込まれ，本来の欲望や主体性を見失いがちとなる。見田はこうした構造を「疎外」の一形態として捉え，単なる金銭や学歴，地位といった狭義の資本の問題にとどまらず，むしろ外的な価値への依存やそこから生まれる「不幸」や「空虚感」のメカニズムを問い直している。

たとえば，「高校生の現代職業観」では，学歴そのものが未来への選択肢を広げる道具ではなく，あたかもそれ自体に自立した価値があるように考えられている状況が描かれている。同様に，「地位」とは本来は多様な欲望を達成するための手段であるはずが，まるで貨幣のような一般価値形態として自立化してしまうという議論が提示される。これらはいずれもマルクスの「G-W-G'」図式を参照しつつ，社会意識論の領域に展開された事例として見田は取り上げているのである。

そして，この「非本来的」価値の追求がもたらすのが「疎外」である。人々は当初，自らの欲求を充足するために価値を手段化するが，いつしかその価値が自律的に肥大化し，主体の行為や選択を逆に規定するようになる。見田は，そうした「疎外」状況を分析しながら，貨幣や学歴，地位といった諸価値がそれぞれの文脈でどのように人々の意識を捉えていくのかを詳しく検討している。ここに，欲求の「無限性」と功利主義的立場への批判という二つの視点が収斂し，さらに価値の「外在性」がどのように形成されるかという問題が浮かび上がる。

以上のように，見田の社会意識論では，マルクス由来の「手段の自己目的化」や「疎外」を横断的に再解釈することで，学歴・地位など多様な領域で「非本来的」価値にとられる様子を考察している。それは価値意識論における功利主義批判と欲求の無限性の統合を踏まえつつ，同時に人間の主体性や幸福観にまで踏み込んで考察を行うものである。こうした見田の一連の議論は，社会意識論のなかでマルクス理論を受容し，外部的な価値に翻弄される人間の構図を多角的に検討した事例として捉えられると言えよう。

第6章 社会意識論におけるマルクスの受容—「都市」という議論—

また社会意識論の中では「都市」という単位もマルクスの議論に従いながら考察の中に組み込まれた。浅野（2000）の整理によれば、マルクスが都市と農村の分裂について考察した範囲は、『ドイツ・イデオロギー』や『共産党宣言』といった特定の著作に限られている。都市という単位は、マルクスにおいては、生産力の発展や分業の進展に伴う歴史的過程の一部として触れられてはいるが、それ以上の独立した議論が展開されることはなかった。例えば、『ドイツ・イデオロギー』では、「都市と農村の分裂」が農耕労働と商工業労働の分離の結果として記述され、生産関係の変化に伴う一般的な社会発展の一側面として位置づけられている。また、『共産党宣言』では、ブルジョアジーが農村を都市の支配下に置き、農民を都市的生産様式に組み込む過程が強調されるものの、これは資本主義社会の特徴の一つとして述べられるにとどまっている（浅野 2000）。このようなマルクスに対して、見田はいくつもの文献で「都市」という地域を主題にした考察を行なっている。

第1節 憧れの形成

時系列に従えば、「不幸の諸類型」で初めて、「都市」は見田において明確に取り上げられた。見田は現状を抜け出そうとして転職や上京を目論む人々の例を複数取り上げながら当時の日本における疎外の状況の一部を以下のように記述している。

〈都会〉や〈大企業〉〈第労組〉へのあこがれと反撥をともに孕んだ、一種のやるせないアンヴィヴァレンスを形成している（見田 1963b : 63）。

一般的に「憧れ」はネガティブな意味合いを持たないが、それが反撥を孕む「アンヴィヴァレンス」な概念として取り上げられるのは、本章1節の考察でも見られた、「非本来的」な価値を両義的に捉える見田にみられる考察の特徴である。その中で大企業や第労組に加え、非本来的な価値の1つとして提示されているのが「都市」である。以下に見られるように都市は主に「憧れ」や「解放」をもたらす対象として見田によって考察されてきた。

「新しい望郷の歌」（見田 1965b）では、1960年代の日本社会における家郷（ふるさと）の喪失と再構築の過程が論じられている。見田は、農村の自然村秩序と大家族制の解体によって生じた「出稼ぎ型」社会構造の崩壊が、都市部でのアノミー（規範の喪失）を深化させたと指摘する。しかし、この状況に直面した労働者やホワイトカラー層は、旧来

の「第一の家郷」への回帰ではなく、都市における「第二の家郷」の構築へと向かう。所得倍増計画や福祉国家のビジョンがこうした動向を支え、経済的基盤（家産の形成）と精神的拠点（愛情共同体）の創設を通じて新たな「家郷」を築こうとする動きが現れる。見田は、この過程が社会心理的に望郷の歌や家郷再建の夢を生み出すと同時に、日本社会における集団的な意識と連帯の変容を示すものと捉えている。見田の「新しい望郷の歌」における未来の家郷の議論は、アノミーの克服に向けた実践的動態として、デュルケーム的な視座を踏襲しつつ、貨幣経済への参与を前提とする点で独自性を示す。

見田は、農村秩序や大家族制の崩壊に伴い、労働者やホワイトカラー層が「過去の家郷」から切り離され、都市への「羨望」によって「第二の家郷」を構築しようとする過程に注目する。ここで未来の家郷とは、貨幣的富を基盤とする新たな生活拠点であり、その形成過程は単なる経済活動ではなく、切実な生存の賭けとして描かれる。ここではそれが「決死の跳躍」（見田 1965b：217）として括弧付きで表現される。この「決死の跳躍」は、貨幣的富の追求を通じて「未来の家郷」を形成しようとする労働者やホワイトカラー層の切実な努力を象徴する言葉として用いられている。この「決死の跳躍」という表現は、マルクス『資本論』第一篇第4章における「Hic Rhodus, hic salta！（ここがロドスだ、さあ跳べ！）」（Marx・Engels 1867 /1969：289）の議論に通じるように思われる。

マルクスは、資本が「価値の自己増殖」を実現するためには、流過程において剰余価値を生み出すという「跳躍」が不可欠であり、それは同時に流通の中で行われつつも、その外部では不可能な矛盾的条件下にあることを指摘した。見田はこの論理を引き継ぎ、自然村秩序の崩壊と農村から都市への移動という歴史的過程の中で、労働者が「貨幣的富」を追求する姿を「決死の跳躍」として位置づける。彼らは「第一の家郷」を喪失しつつも、未来に「第二の家郷」を構築しようとする主体的な跳躍を遂行しているが、その拠り所は資本主義的論理に媒介された貨幣的富に他ならない。この跳躍は、資本が剰余価値を生むための矛盾を内包する運動と同様に、近代化の過程で「未来の家郷」が構築される条件そのものが、労働者の不安と喪失感から裏打ちされたものであることを示している。これらの内容は「新しい望郷の歌：現代日本の精神状況」（見田 1973b）においても同様の議論が展開されている。こ

「文明開化の社会心理学」（見田 1965c）でも同様の議論が行われている。ここでは明治初期から中期にかけての日本社会における「文明開化」の過程を社会心理的側面から分析し、民衆の意識や価値観の変容が考察されている。見田は、文明開化が単なる西欧化や表層的な近代化ではなく、日本人の精神構造に複雑で矛盾した影響を与えたことに注目する。都市部を中心に始まった文明開化の波は、地方や農村において「受動的な解放感」として広がり、村役人や新興の小リーダー層による「時勢」への迎合として民衆に強制され

た。しかし、民衆にとっての「ひらける」という感覚は、抑圧からの解放や合理性の追求という前向きな側面を持ちながらも、物質的・感性的欲望の顕在化や新たな権威への依存を生むという二面性を持っていたと見田は主張する。また、教育制度の導入やリテラシーの普及は、民衆を「魔術的世界像」から解放し、意識の拡大をもたらしたが、それは「権力」による上からの近代化の枠内であることが考察されている。見田は、こうした過程を「価値の準拠の再編成」とまとめた上で、西洋文明が伝統的な「都雅（みやこび）」への憧れと結びついて受容された点を指摘し、西洋文明は「新たな都」として認識されたことを考察している。

ここでは、「望郷の歌」においても考察されていた都市への憧れについての社会学的分析がみられる。明治期の「文明開化」においても、都市は「新しい都」として象徴化され、伝統的な「都雅（みやこび）」への憧れが西洋化を伴って再構築された。都市は解放と合理性の象徴でありつつ、同時に貨幣や物質的欲望と結びつく「現世的価値」の中心として機能したもものとして考察されているのである（見田 1965c : 82）。

第2節 「まなざし」としての「都市」

「まなざしの地獄」（見田 1973c）もこの「都市」の特徴を主題にした論文として取り上げられる。貧困の研究としても評価される（西澤 2015 : 11）本稿は、もともと「都市における人間と疎外」という原稿タイトルであった。そのタイトル通り、ここでは「都市」は「疎外」と結び付けられて論じられている。ただ文の序盤ではその様子は見られない。はじめの内容はこれまでの議論の中でも見られた通り、都市が1つの憧れとして形成されている様子を記述している。

都市とはたとえば、二つとか五つとかの階級や地域の構成する沈黙の建造物ではない。都市とは、ひとりひとりの「尽きなく存在し」ようとする人間たちの、無数のひしめき合う個別性、行為や関係の還元不可能な絶対性の、密集したある連関の総体性である（中略）〈東京〉にたいするN・Nの過剰なまでの期待は、東京それ自体の実像に基づくというよりもむしろ、このようにもはげしくかつ執拗な家郷嫌悪の逆立した像に他ならなかった。それは家郷のまざしさと停滞性からの脱出の方向性として〈それであるはずのもの〉として、外部から投影せられた都会の対他存在であった。〈東京〉があつて〈上京〉があるのではなく、まざし〈上京〉があつて〈東京〉があるのだ。ここで二つのことを確認しておくべきであろう。第一にN・Nのかくも情悪した家郷とは、共同体としての家郷の原像ではなく、じつはそれ自体、近代資本制の原理によって風化され解体させられた家

郷であること、いわば〈都会〉の遠隔作用によって破壊された共同体としての家郷であったことである（見田 1973c : 98-9）

このように、冒頭の議論では見田における「都市」について、「疎外」と結び付けられた様子は見られない。ただ、この「まなざしの地獄」における都市の考察は、これまでの見田の議論と連続性をもちながらも、新たな視点を提示していると言える。それが都市を単なる物理的空間ではなく、個々人の「尽きなく存在し」ようとする欲望や憧れが凝縮された場であると説明した点である。見田は、都市を「密集した個別性の連関の総体性」として捉え、それが「解放」と「憧れ」を象徴する一方で、家郷の喪失や解体と密接に結びついていると論じた。奥村（2016）はこれを「『都市』というものを見る図土地の反転を試みた」と考察している（奥村 2016 : 100）。この観点は、「新しい望郷の歌」や「文明開化の社会心理学」で示された都市への憧れが、解放や合理性の象徴として受容される一方で、貨幣的富や物質的欲望と結びつき、疎外の源泉ともなり得るという議論と重なる。

さらに、見田は「まなざしの地獄」において、「都市」が理想化されるプロセスに焦点を当て、「上京」という行為が、家郷の喪失感や停滞からの逃避によって形作られた象徴的な投影であると述べている。このような視点は、明治期の「文明開化」において都市が「都雅」や西洋化の象徴として機能した状況と共通しており、「都市」への「憧れ」がしばしば現実との間に乖離を伴いながら形作られてきたことを共通して考察している。のちに考察を行うが、これは都市というものをサルトルにおける「集列性」の議論に従って提示された、見田における「都市」の概念である。この都市の論理に回収されていく N・N を考察したのが「まなざしの地獄」であるわけだが、その結論では以下のように考察されている。

ボヘミヤの箱は堅固な物質によって、成長する少年たちの肉体を成形してゆく。〈まなざしの地獄〉は他者たちの視線によって、成長する少年たちの精神を成形してゆく。ボヘミヤの箱と異って、それは少年の内面を成形するのであるから、それは彼らの自由意思そのものを侵食せざるをえない。しかしどのような機制をとおして? N・N のばあい、一つは〈演技〉の陥穽によって、一つは〈怒り〉の陥穽によって。〈演技の陥穽〉についてはわれわれはすでにみてきた。自己をその表相性において規定してしまうまなざしのまえで、人はみずからの表相性をすすんで演技することをとおして、他者たちの視線を逆に操作しようと試みる。「存在を所有によって規定する社会の漂流物である少年ジュネは、存在する

ために所有しようと思う。」 ローレックスの腕時計 ロンソンのライター。整髪用のクシ。 明治学院の学生証。ところがこの〈演技〉こそはまさしく、自由な意思そのものをおして、都会がひとりの人間を、その好みの型の人間に仕立てあげ、成形してしまうメカニズムである。人の存在は、その具体的な他者とのかわりのうちにしか存在しないのだから、彼はまさしくこのようにして、その嫌悪する都市の姿に似せておのれを整容してしまう。他者たちの視線を逆に操作しようとする主体性の企図をおして、いつしかみずからを、都市の要求する様々な衣裳をごてごてと身にまとった、奇妙なピエロとして成形する。N・Nの話ではない。われわれのことだ。(中略)これを第一の疎外とすれば第二の疎外は、まさにこの第一の疎外を突破しようとする反抗の形態を、またしてもさきまわりして捕捉してしまう疎外として存在する(見田 1973c : 15)

「まなざしの地獄」における引用部は、見田がこれまで繰り返し論じてきた都市の問題を、改めて「疎外」という観点から包括的に描き出している点で注目される。第一に、すでに「新しい望郷の歌」や「文明開化の社会心理学」などで都市が「憧れ」や「解放」をもたらす空間として言及されていたことを踏まえると、ここでも同様な問題関心のもと、見田は都市の議論について考察したと推察できる。ただ、ここではその議論が「疎外」として表されている。「都市への上京」や「出稼ぎ」などの事例で見られた「都会」へのアンヴィヴァレンス——つまり解放を期待しつつも、そこで新たな抑圧を受ける二重性——が「他者の視線によって内面が成形される」という形で、一つの「疎外」の構造として論直されているのである。

ここの「疎外」は、いわゆるマルクスの「労働手段や生産手段との分離」による「疎外」とは明らかに異なる意味合いで用いられている。「不幸の諸類型」などで、労働者が資本に従属し、自らの生活を商品経済に翻弄される状況として、マルクスの意味合いで「疎外」は用いられていた。ところが「まなざしの地獄」では、都市という場における「他者の視線」が、個人の自由や主体性を侵食するメカニズムとして描かれ、「疎外」の主眼が「生産手段からの分離」から「精神や内面のねじ曲げ」へとシフトしている。これは、都市空間に暮らす人々が、他者のまなざしを逆手に取って「演技」するうちに、かえって都市の「型」に自分をはめてしまうという逆説を通じて、「疎外」の意味を拡張したものであると考察できる。

加えて、前節で論じた「非本来的」な価値の追求もここで改めて考察されている。貨幣や学歴、地位といった「非本来的な価値」の追求は、「まなざしの地獄」までは、「都市性」の文脈の中で語られることはなかった。たとえば『純粹戦后派の意識構造』や『貧困

の中の繁栄』では、貨幣や学歴、地位など「非本来的」な価値が追求される様相をとりあげながらも、それらが「日本的な価値観」のなかでどのように形成され、いかに人間の行動を規定しているかを論じているにとどまり、都市性は前景化していない。これらの論考では、あくまで「学校」「会社」といった日本社会特有の制度や慣行のなかで、個人が外部の価値基準に依存してしまう事態が焦点であり、都市の構造や「まなざし」といった空間的・社会的布置が、非本来的価値の追求を促す要因としては明確に位置づけられていなかった。一方で「新しい望郷の歌」や「文明開化の社会心理学」では、都市への「あこがれ」そのものは論じられつつも、そこでの非本来的価値の追求が都市の構造として結び付けられて捉えられるわけではない。

しかし「まなざしの地獄」においては、都市空間の「まなざし」そのものが、人間を「非本来的」な価値へと誘導する疎外の装置として論じられている。ここで初めて、これまでの貨幣・学歴・地位などをめぐる「手段の自己目的化」の構図が「都市性」に貫かれた形で扱われるわけである。「都市に出る」という行為や都市内部での生活が、人々を「その都市が求める型」へと誘導し、欲望を演技や反抗へと一元化してしまう構造が描かれている。こうして「非本来的な価値の追求」が、今度は「都市性」の観点から、「疎外」として総合的に把握される点は、「望郷の歌」や「文明開化」とは大きく異なるポイントである。

第3節 章のまとめ

本節では、見田が「都市」という単位をマルクスの議論に照らしつつ検討している点に注目した。マルクスは『ドイツ・イデオロギー』や『共産党宣言』などで、農村から都市へ至る歴史的過程を分業の視点から概説してはいるが、それを超えた独自の都市論を展開してはいない。対照的に見田は、「不幸の諸類型」で初めて「都市」を具体的に取り上げ、転職や上京における「都会」へのあこがれと反発のアンヴィヴァレンスを示し、「新しい望郷の歌」や「文明開化の社会心理学」では、都市が「解放」や「憧れ」の空間として作用する状況を示した。そして「まなざしの地獄」では、都市が他者の視線の集中する舞台であり、家郷の解体と表裏一体の「疎外」を生むことが論じられる。ここで見田は、都市を単なる物理的空間ではなく、「人びとの欲望が凝集し、内面を成形する装置」として描き、「上京」や「都会化」の裏に潜む疎外の機制を明確化する。とりわけ、都市を「まなざし」の装置として捉える視点は、貨幣・学歴・地位などの「非本来的な価値」の追求が、都市の構造そのものに貫かれている事実を浮き彫りにする。

したがって、これまで見田が論じてきた「非本来的」価値（たとえば『純粹戦后派の意識構造』や『貧困の中の繁栄』が扱う貨幣・学歴・地位の追求）は、主に学校や会社の制

度における現象として分析されてきたが、「まなざしの地獄」において、それらが「都市性」と結びついた「疎外」として統合される点が特徴的であると結論づけられる。都市は「他者のまなざし」の集中によって主体の内面を侵食し、個人を「都会が求める型」へと演技・順応させるメカニズムを生む。こうして、かつては単に「憧れ」や「解放」といった抽象的に語られていた都市観が、「まなざしの地獄」の中では非本来的な価値の追求を強化する場として「疎外」に結び付けられて論じられるのである。マルクスの議論から離れたところから始まった都市の議論は、『まなざしの地獄』において、「疎外」の論じ直しが行われることによってマルクスの議論と合流するわけだ。言い換えれば見田における都市論は、マルクス由来の分業・階級構造の視座を下敷きにしつつも、そこに「都市」の議論として「まなざし」という新たな媒介を加えたものとして論じられるだろう。

第7章 サルトルを介したマルクスの受容

「マルクスの受容」と題される本論文において、サルトルとの関連性を検討することは一見、主題から外れているように思える。ただ、実際はいくつかの文献を通じて、見田はサルトルの考察を援用する形でマルクスの受容を行っている文献が見られる。ここでは、その内容をおいながら、サルトルを介したマルクスの受容についての考察を行いたい。ただ、本論文ではマルクスの受容が主題であるために、そこに直接関係する内容のみ論じる。ここでは「他者」と「希少性」の2つに絞ってサルトルの受容について考察を行う。

第1節 「他者」の導入

これまで確認した通り、見田は、マルクスの議論に即す限りでは、基本的には社会階級ないし社会意識論の議論の中において内容を展開しており、その内容は価値意識の理論からに基づいていた。内容は、主に人々の欲求や、価値の類型などにまとめられる。ただ、サルトルの影響が見られる1969年ごろからの文献では明確に異なる内容の議論が見田の考察の中に持ち込まれるようになる。それが、本章で主題となるサルトルを介したマルクスの受容である。

ここではまず、その契機としてみられる見田の議論における「他者」の導入について示す。主な内容は1970年代に書かれた文献をまとめた『人間解放の理論のために』（真木1971a）で論じられるが、その前に、サルトルの影響が見られるのが「失われた言葉を求めて--想像力の陣地の奪還〔現代学生の精神状況〕」⁸（見田1969）である。

「失われた言葉を求めて」では、現代の青年たちが既存の言語体系を不信し、自己表現を試みるたびに「違う」と感じてしまう状況についての考察が行われている。「言葉」は本来、他者との伝達を目的とする社会的な関係を結ぶためのメディアの1つである。ただ、ここで論じられている青年たちは、内面を十分に言語に表現できず、むしろ青年たちの感覚を表現するのを阻んでいる。こうした「言葉」の「空虚さ」や「すきま」は、単なる個々人の問題ではなく、文明全体のねじれた意味構造に由来すると見田は指摘する。その結果、青年たちは既存の言葉を拒絶し、直接行動や「拒否」「介入」へと向かうが、その過程でむしろ自己の孤立を深めるという矛盾に直面してしまうという。

以上が「失われた言葉を求めて」の内容であるが、この問題を見田は「他者」との関係性、ないし「疎外」から説明を行なっている。冒頭から「およそ一人の人間が他の人間の内面をとりわけ異なる世代に属する他の人間の内面を『理解する』などということが、どのような意味をもちうるかということ、まさに今日の学生運動は提起している」

⁸ 以下では「失われた言葉を求めて」と記述する。

(1969:65) と述べており、ここではそもそも「他者」の内面理解が困難であることが議論の中心に据えられている。そこから見田は既存の言語体系や既成価値を介して他者へと抱く青年の不信を「疎外」の一形態として捉え、そこから生まれる孤絶感や直接行動への偏りを繰り返し論じている。「いっさいの他人の言葉への不信が凝固し、『われわれの言葉』の創造がもはや不能と見えるとき、その乾いた感性の荒野にはもはや『参加』もなく『連帯』もない」(1969:本文)。こうした不信が「参加」や「連帯」という他者との関係を失わせると指摘するのはその一例である。また「少なくとも主体的自己の呼びかけに呼応する他人の声への信頼を根拠としている」(1969:本文)はずの連帯が成り立たぬ状況下で、青年は外部とのかかわりを「自分の内部にある怒りあるいは確信を『表現』する」ことに求めざるをえないとも主張している⁹。この内容は、以下でも論ずるような「他者」の議論と捉えられる。「失われた言葉を求めて」発表された1969年以前の論文では、社会意識を論じ、その価値と個人との関係を考察することがメインだった。ただ、以下にも見られるように見田はこの時期から「他者」を持ち出して議論を進めるようになる。

このような「他者」についての議論は「人間的欲求の理論--人間解放の理論のために」¹⁰(真木 1969)でも展開される。「欲求の理論」は、人間の行動を基底づける「欲求」とは何かを問い、その欲求がどのように社会構造や他者との関係に組み込まれ、さらに未来社会像の構想につながりうるかを明らかにしようとした文献である。

冒頭では、従来の「人間の欲求」を一面的に捉える見方に対して疑問を示した上で、飢えや生理的必要ばかりでなく、より高度な文化的・道徳的・社会的な派生欲求を含めた総体として考察する必要性を強調する。そして中盤では「稀少性」と「相剋性」が、人間同士の相互背反や衝突を不可避にする仕組みであることを説き、そこから所有欲求や権力欲求、道徳意識といった要素が派生するプロセスを分析する。終盤では、そうした複雑な欲求構造の中でも、人間が自己の価値や「生きる意味」を見いだす主体として「対自」の次元をもつことが示され、その「自由」と「根拠」をいかに獲得するかが未来社会像の構想と直結するという結論へと至る。つまり論文全体の流れとしては、(1)人間的欲求の全体的把握から出発し、(2)社会や他者との相剋性を分析し、(3)そこから派生する道徳意識や権力の欲求を整理し、(4)最終的に「生きる意味」を中心に据えた未来像の公準へと議論を進めている。

⁹ ここで用いられた「疎外」の用法については後述。

¹⁰ 以下からは「欲求の理論」と記述する。

この内容は、1つ目に「他者」の議論の展開、2つ目に「希少性」と言う概念の導入、そして3つ目に「非本来的」な価値の議論の展開へと考察する内容が複数にわたる。本説では、1つ目の「他者」について論じ、2つ目と3つ目については、次節以降に考察を引き継ぐ。

「失われた言葉を求めて」においては、「他者」の議論は、対話における理解に内容が近づけられて論じられていた。それが「欲求の理論」ではその「他者」の問題がさらに展開され、主に「希少性」との関連性、そして「相剋性への主体の対応」の章で論じられている。ここでは、資源や生活手段の「限られた条件」のもとで、個人が欲求を追求するやいなや「必然的に生じる相互背反性という状況」（真木 1969：19）から出発し、そこから引き起こされる他者との衝突や道德意識の形成を詳しく考察しているのが特徴的である。

たとえば論文中では、「たとえば他人を屈服させ支配したいという欲求は、屈服し支配される人々の存在を前提として初めて実現するだろう。（中略）一般に他者に対する優越を求める欲求をすべての人々に充足させることは、論理的にそもそも不可能ではないか？」（真木 1969：17）と指摘される。さらに「稀少性（中略）のもとで、諸個人がその本源的な必要・要求を追求する場合、必然的に生じる相互背反性（中略）この対応の様式は、他者の目的性に対する主体の拮抗という形態をとるか、もしくは他者の目的性への主体の適応の形態をとる」（真木 1969：19）とも述べられている。

この前者の拮抗における二次的欲求は「限られた物的資源や手段の排他的占有への志向、すなわち所有欲求」、「直接的に他者に対する支配権の獲得への志向、すなわち権力欲求」として現象する。また、後者の「適応」としては「他者の欲求の内面化としての『道徳的』な志向性」が挙げられる。道德意識は「常に何らかの人間の欲求の反映でもある」ため、主体を拘束しながらも一方で「他者の欲求を自己の内面に先取りすることで、他者との関係を相乗性に転化する」働きをもつ。ここに「他者」を前提とした「相剋性」が内面化された「良心の声」として主体の内部に葛藤を生じさせる状況が明示される。

このように「欲求の理論」では「失われた言葉を求めて」で論じられていた「他者」の存在による拘束と自由の問題が、「希少性」や「相剋」などの用語と関連させながら欲求の議論として展開している。これらは「他者の自由は自己の疎外と相剋の関係にあり、自己は他者のまなざしによって客体へと疎外される「対他存在」となる」（大澤ほか 2012：1208）とまとめられるサルトルの議論と同様なものとして理解できる。これはマルクスを下敷きにした『弁証法的理性批判』における解釈から示されたものであり、ここからサルトルを媒介としたマルクスの受容が行われていることが窺える。

第2節 「希少性」という議論

「欲求の理論」では、先に確認した通り、「希少性」についても論じられている。「希少性」とは、見田においては「人間の欲求に対する生活資料の供給が限られている条件のもとで、諸個人がその本源的な必要・要求を追求する場合、必然的に生じる相互背反性という状況」であると定義されている（真木 1969：17）。この相互背反性において、諸個人は自己の欲求を実現するために他者と衝突することを余儀なくされる。その衝突の結果として、「限られた物的資源や手段の排他的占有への志向（所有欲求）」や「他者に対する支配権の獲得への志向（権力欲求）」といった、二次的な欲求が派生する。このように希少性は相剋性の直接的な要因であり、個々人の競争的な欲求構造を形成する基盤として位置づけられる。また、「人類の歴史の始まり以来、希少性の面前における諸個人の欲求相互の相乗性と背反性、共同性と相剋性が入り組んだ弁証法」が、社会の力学を規定してきたという指摘が行われている。これは希少性が単なる資源の不足の議論としてではなく、社会学の議論ないし、社会そのものの歴史的な展開を生み出す根本的な原理であることを示している。

このような内容のもとに「希少性」は展開されるが、この希少性はサルトル由来の概念であることが考察できる。竹本（2014）によれば、サルトルの『弁証法的理性批判』では、「希少性」を人間関係や集団形成の根底にある概念として位置づけられているという。ここでの内容に従えば、「希少性」とは、人口に対する「物質」の不足という量的事実を意味し、人間の歴史における根本的な関係としての役割を果たしている。サルトルは、欲求や「欠如」という概念を通じて、人間の実践が「物質」との関係性の中で形成されることを強調している。ここでいう欲求は、人間が自己保存を求めらる中で物質に働きかける動機となり、これがさらに「否定の否定」として、物質に対する新たな意味を生み出すという。

このプロセスの中で、「希少性」は単なる不足の問題を超え、人間同士の利害や対立を構成する要因となることがサルトルによって主張されるという。また、サルトルの議論は「労働」を通じた希少性の克服に発展するが、その一方で、加工された物質が人間を逆に支配し、「疎外」を引き起こすことも指摘している。そして堀田（2016）によれば、これらの「希少性」の議論はマルクスにおける史的唯物論そのものを規定する概念であるという（堀田 2016：55-6）。『弁証法的理性批判』で、サルトルは、マルクスの議論を「希少性」から捉え直したわけだ。このことから、「希少性」の議論は、マルクスの受容の過程として示すことができる。ここではその内容は具体的には論じられていないが、次章の存立構造ではこの「希少性」の議論が、サルトルを介したマルクスの受容として示される。

また、「欲求の理論」は、冒頭では「望ましい社会とは何か。われわれが獲得すべき未来とはどのような世界でなければならないか」（真木 1969 : 17）という形で論文全体にまたがる問題設定が示されている。その上で、社会に生きる人々に対する価値のあり方が考察された。そこで示されるのが、第4章における「欲求の無限性」と第5章における「非本来的な価値の追求」として示される内容に対する新たな視点からの考察である。それは一言で言えば、欲求、価値の議論への「他人」という概念の挿入である。まず人々の欲求というものは無限に拡大することが確認される。

第一に人間の欲求は無限に発展し拡大してゆく。一つの欲求が充足されると、ほかの一つの欲求がそこに生まれる。仮に今ある欲求がすべて満足されたとしても、人々はそのにあらたな不満を発見するだろう。だから人間の欲求の充足を追求することは無限に遠ざかる曇気楼を追っていくようなむなしい行為ではないだろうか？（真木 1969 :17）

その上で、欲求の「相互背反的」な側面が指摘された。

第二に人間の欲求のうちのあるものは相互背反的である。例えば他人を屈服させ支配したいという欲求は屈服させ支配されるという人々の存在を前提として初めて実現するであろう。志を得ぬ人々を踏みつけにすること自体に快感を覚える性格をすら、われわれは現実に見ることができる。一般に他者に対する優越を求める種類の欲求を万人に充足せしめるということは、論理的にそもそも不可能ではないだろうか？（真木 1969 : 17）

これまでの議論で見られた通り、社会意識論における欲求の「無限性」についての議論は、マルクスにおける考察の内容が発端となっており、同時に欲求自体の議論はその内容に収斂する形で展開されていた。ただ、そこに欲求が「相互背反的」に想定される状況が存在することが考察として加わるのである。欲求に関するこのような想定は「欲求の理論」が出版される1969年以前の議論には見られなかった。これはこれまでの議論からは見られない考察の形である。「価値意識の理論」が修士論文として提出された1961年以来、欲求の無限性の議論は内容を引き継ぎながら明確に見田の文献の中で考察されてきた。ただ、前章で確認した通り、その共通性は確認できるものの議論の進展が見られない。それがここで「希少性」の概念を持ち込むことで「欲求が無限的である」、というこれまでの説明から欲求の対象自体の背反性によるものとして説明され直されるのである。いわばこの気づきは、「価値意識論」における「欲求の無限性」の考察に対する見田自身

の回答として読むこともできる。第4章で確認された通り、欲求の無限性の議論についてはマルクスを引きながらその原因について考察が行われていたものの、具体的な回答は保留されていた。本論文の考察からは、「交換価値」に依るところの説明が行われている。それが、「欲求の理論」では欲求に対して、その社会的な達成において生じざるを得ない前提として他者により生ずる「希少性」を設定する。そうすることで欲求は所有や権力につながる欲求を抱き、その無限性が希少性の中で改めて問われるようになるのである。

「コミューンと最適社会」（真木 1971b）でも同様な、サルトルを介したマルクスの受容が見られる。ここではサルトルにおける「相剋」や、「他者」「集列性」, 「希少性」の概念が中心となって論が構成されている。この文献が見田の議論全体の中でこの論文がどのように解釈されるかについては、徳宮（2022）の「2.1 社会構想の不-可能性と他者——「コミューンと最適社会」（1971年）」（徳宮 2022：74-8）で、詳細に考察されている。結論だけを引けば、「コミューンと最適社会」全共闘運動の時代背景を受け、社会構想における「最適社会」と「コミューン」という二つの理念の可能性と限界を検討した論文である。この論文の意図は、どちらか一方を採用するのではなく、両者が抱える内的矛盾を明らかにし、その限界を示すことにあった。ここでも「稀少性」の概念は中心的に論じられている。

また、堀田(2016)によれば、サルトルにおける希少性の概念は、マルクスの史的唯物論から引き出された概念であるという。サルトルにおいて希少性は、人間社会を規定する基底的条件として位置づけられ、特に財の希少性が生産様式や社会構造、政治思想を形成する要因とされる。この見解は、マルクスの『経済学批判』における下部構造と上部構造の関係性を踏まえており、物質生活の生産様式が社会全体の発展を方向づけるという理論と一致する。サルトルは、財の希少性が人々に労働を強いることで疎外を生み出し、構造的暴力の温床となると考えた。この観点から、マルクス主義は希少性を克服する唯一の思想であり、現代社会における疎外と暴力を解消するための不可欠な地平と見なされる。したがって、サルトルの希少性の概念は、マルクスの唯物論的枠組みの中で、人間社会の変革を志向する思想として発展的に位置づけられているのである。

以上がサルトルを介したマルクスの受容についての考察だが、この内容からは、これまでも確認してきた、「3つの視点」について、一定の回答が見出されているものと考えられる。それがこれまで多く論じられてこなかった価値の「外在性」についての問いである。価値の「外在性」については第4章第3節で確認した通り、マルクスの考察の援用において、主に「物神性」に関連する問題として論ずることができることが見田によって示されていた。その上で、価値の「外在性」の存立の機制が問われるわけだが、価値意識論においてはその解答が明確に示されることはなかった。ただ、このようにサルトルを媒介と

して導入された「他者」と「希少性」の観点は、価値がそもそもどのように「外在性」を帯びるに至るかという問題に、重要な示唆を与えるものと考えられる。すなわち「他者」が存在するかぎり、自らの「欲求」は他者の欲求と不可避に接触し、その局面で発生する「希少性」が、主体同士の行為を相互に拘束する「相剋性」を生み出す。そしてこの「相剋性」のなかで、それぞれの主体にとっての「価値」は、もはや単なる「主観的」な充足対象ではなく、他者の行為に対する客観的基準」として自立化していくのである。より厳密に述べれば、ある主体が、自己の欲求を「充足しよう」と企図したとき、他の主体が同じ客体をめぐる別個の欲求を示せば、ここに「希少性」が立ち現われる。このとき各主体は自らの行為を調整せざるをえなくなり、その反復を経ることで「価値」は「外部に在るもの」として一つの客観的な実在性をもつに至る。すなわち、各主体は価値を自分が欲求するからのみ有効なものとは見なせなくなり、他者もまた欲求し合うものとして、あたかも自律的に存立するかのように「価値」を認知するに到達すると言えるだろう。「結論を一挙先に言ってしまうえば、それはこのような物存在を媒介として、人格と他の人格とが、相互に対立し相剋し合っているからであり、したがっていずれの個人にたいしても、これらの物存在は、彼らの意思とは独立して対峙する不可視の龐大な他者たちの意思を、総括して凝縮してさしむけてくるからである」

この内容については、次章の第8章で中心的に問われることとなる。

第3節 章のまとめ

以上に見たように、見田はサルトルの議論、とりわけ「他者」と「希少性」という観点を介してマルクスを受容している。サルトル自身が『弁証法的理性批判』で示したように、社会的な行為や価値の成立には「他者」が不可避の要因として組み込まれ、その際、「欲求する主体」が複数存在することから生じる「希少性」が相互背反を生み出す。この観点により、見田は「無限に拡大する欲求」が単に自己完結的な問題ではなく、「他者」との衝突や競合によって社会的に規定され、結果として価値が個人的志向を超えて「外部に在るもの」として立ち現れるメカニズムを説明しているのである。

ここで思い出されるのが、本論で繰り返し取り上げてきた「3つの視点」である。すなわち功利主義への批判、欲求の「無限性」、価値の「外在性」の問題である。見田はこれら3つの視点を、当初はマルクスの理論から断片的に援用しながら社会意識論や価値意識論の形で展開していた。しかし、その後のサルトルに基づく「他者」や「希少性」の導入により、「欲求の無限性」との功利主義批判が、他者との相剋の中でどのように具体的な社会構造に結びつくかが考察され、あわせて価値の「外在性」がどのように生成されるか、という問いについても考察が行われた。

つまり、サルトルによるマルクス解釈は、見田のなかで「価値」の社会的形成・物神化を論じる大きなヒントとなったといえよう。もともとマルクスにおいて示唆されながら必ずしも正面化されていなかった「他者」の構図や「希少性」をめぐる問題は、サルトルを紹介することで主題の中心となり、見田の議論に統合的な視座を付与したと言えよう。そしてこの統合の過程はのちの『現代社会の存立構造』などで全面的に展開されることになる。この流れを踏まえるとサルトルはあくまで補助線としての役割を担いながら、見田が価値や欲求、そして「外在性」という論点を包括的に再構成する契機を提供したと評価できる。

第8章 存立構造論におけるマルクスの受容

『現代社会の存立構造』は、「マルクスの諸著作、とりわけ『資本論』に対する創造的読解という側面」（真木・大澤 2014：208）であると評価されながら「理論的な生涯全体の総括である」（真木・大澤 2014：199），と見田自身によって言及されている。このことから『存立構造』は『資本論』の読解という形をとった彼の生涯の理論的な総括であると理解することができる。ここではサルトルと廣松渉の議論を踏まえた存立構造論におけるマルクスの受容を考察する¹¹。

第1節 日本におけるマルクス受容

考察を行う前に、見田におけるマルクス受容を主題として設定する上での背景を確認する。それは1つに、日本におけるマルクス受容、そして、その中で生じた受容そのものあり方の転換である。日本におけるマルクス受容の動向については当時のマルクス研究の総説論文に位置付けられる「マルクス研究の新動向」において、以下のような形で整理されている。今村は、1965年から1975年にかけての日本におけるマルクス研究の潮流を、多様化と自由化の時期として特徴づけている。

この時期においては、従来の「オーソドックス」な研究の枠組みを超え、疎外論、物象化論を中心とした新たな理論的アプローチが台頭したと指摘されている。まず、疎外論的立場については、内田義彦の『資本論の世界』（内田、義彦 1966）がその出発点として位置付けられる。内田は、初期マルクスにおける静態的な疎外論を『資本論』の動態的な分析と結び付け、労働過程の中で生じる動態的な疎外を理論化した。彼の研究は、疎外を単なる人間の自己喪失ではなく、資本主義の生産構造における動的な現象として捉えている。平田清明『経済学と歴史認識』（平田 1971）では内田の議論を進め、マルクスの『グルントリッセ』や『資本論』に基づいて人間論的視点を展開した。平田は、マルクスにおける労働の人間の意味に注目し、資本主義が人間の存在そのものにどのように影響を与えるのかを探求し、また、望月清司『マルクス歴史理論の研究』（望月 1973）は疎外論を歴史理論の文脈で再構成したと今村によって整理されている。彼は「共産体-市民社会-社会主義」という歴史的発展の枠組みを提示し、マルクスの歴史理論を包括的に捉え直したそして、物象化論的な展開もこの時期に生じたマルクス理論の展開であると整理されて

¹¹ 本文では主題が逸れるために触れないが、『存立構造』は引用が行われていなくともテンニースにおける「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」の概念との関連性を論じた研究（鈴木、敏正 2022）やデュルケームの「社会的事実」の概念との関連性を論じたもの（小原 1980）など、社会学史に結びつけられる形で考察を行った文献は複数挙げられる。

いる。その中で紹介されているのは廣松渉による、疎外論から物象化論への再整理である。

今村によれば、廣松渉の物象化論は、西欧近代思想の主客図式に基づく従来の疎外論を超克する試みとして位置づけられる。「近世的認識論的構図にぴったりとおさまるがゆえに、近世的認識論的地平を超え出たマルクスの思想を疎外論をもって理解するわけにはいかない」という批判のもと提出されたのが廣松による物象化論である。廣松の物象化論において、物象化とは人間や物が「社会関係の総体」として存在することから必然的に「何か」として現れる現象を指し、これが歴史化と不可分であるとされる。特に『フォイエールバッハ・テーゼ』における「社会的諸関係の総体」を基盤に、マルクスが主客図式を解体し、新たな物象化的＝歴史的存在論を構築したと廣松は解釈している。また廣松は、主体や客体が「常にすでに必然的に『何か』として現れる」（今村 1978：16）ことを重視し、この構造が物象化と歴史化を同時に包含すると主張した。

この内容が挙げられる必要があるのは、今回の主題として設定される見田宗介におけるマルクスの受容はまさに、この時期における日本のマルクス研究の潮流に当てはまるためである。これは年代として当てはまる限りではない。本論の中で整理されるように、見田は日本における特に、60年代のマルクス研究を応用しながら、見田自身におけるマルクスの考察を展開したために主張される。言い換えれば、この日本におけるマルクス受容の動向を見田は存立構造論以前の議論では踏まえていない。この主張は井上（1985）によっても同様に示唆されている¹²。時系列で見れば、このようなマルクス研究の蓄積が参照される前と後には見田におけるマルクス受容に大きな違いが見られるのである。そしてその違いは、日本におけるマルクス受容の変化そのものと対応させながら論ずることができるのである。

第2節 廣松渉の影響

廣松渉への言及は極めて限定的ながら、内容としては非常に重要である。主に『現代社会の存立構造』のなかで多く取り上げられ、とりわけ目立つのは、存立構造論の第一作である「現代社会の存立構造」に収録された「序 存立構造論の問題」であろう。ここで

¹² 「60年代後半から既に、廣松渉が『経・哲草稿』時代の若きマルクスは「主体・客体図式」に依拠する疎外論の地平にあったが、後期に至ってこの「主体・客体図式」を放棄し、『資本論』は「関係の第一次性」の観点に立った物象化論の地平に移行して書かれたものであるとの所説を繰り返し主張し、かかる主張の論点が、若いマルクス研究者たちに一定のインパクトを与えてきたという事実がある。」（井上 1985：42）と述べながら、その例として真木の『存立構造』を取り上げている。

は、社会の「自明性」を問いに立てること自体を理論的な課題として掲げ、その重要性があらためて主張されるのである。

「現代社会の存立構造」において整理されているように、見田はマルクスの『資本論』の読解に際し、廣松渉の『マルクス主義の地平』に見られた態度を全面的に採用している。内容を整理すれば、廣松に倣い、見田はマルクスの著作である「経済学・哲学草稿」と「フォイエルバッハのテーゼ」の間には視座の転換が見られると主張する。

まず、「経済学・哲学草稿」においては、見田言うところの〈疎外論〉が敷かれている。ここでいう〈疎外論〉とは、マルクスの「経済学・哲学草稿」における、国民経済学に見られる私有財産の存在が前提となる態度への批判から示されたものである。国民経済学は「所有欲であり、所有欲にかられている人たちの間の戦いであり、競争」(p. 84)を1つの前提とするが、なぜそれらは前提とされるのか、彼らはそれを明らかにしていない。これに返答する態度を国民経済学は持っておらず、従ってマルクスにおいて批判が行われた。

そこで示されるのが「経済学・哲学草稿」における〈疎外論〉である。見田において以下のように図式化されているが、この内容は、フォイエルバッハの議論を継いだマルクスの指摘を廣松が解釈した上で、見田によって提示されたものである。廣松を引けば「フォイエルバッハは、神の術語（性質）とされている諸々の規定、全治、全能、愛、等々は、人間（人類、類としての人間）の本質的規定性（術語）であるところのものが、倒錯視的に神に帰せられているものだということ」を「宗教的自己疎外として示したのだが、これを先の私的財産そのものの所有を前提とする態度に援用したのがマルクスであった(廣松 232-3)。これは、対象に自らが所有するはずの本質を認める態度、前章の言葉を使えば「価値の準拠」として私的財産を認めるという事実の前提であり、これは国民経済学の態度に対する批判でもあり、同時にマルクスが自身の理論として取り込んだ自明性の対象でもあった。マルクスが問題提起していると主張するものもある（田島 1987）。ここで提出されるのが、フォイエルバッハ-マルクス-廣松-見田へとつながる〈疎外論〉である。

「経済草稿」におけるマルクスはこの主体性の喪失を「労働の対象化」として示しながらその帰結を「疎外」として提示した。

では、ここからマルクスにおいてどのような視座の転換が見られるのだろうか。そこで示されるのが〈物象化論〉である。ここで参照されるのは、「経済学・哲学草稿」の後にマルクスによって書かれる『ドイツ・イデオロギー』であり、ここでは前著の「経済学・哲学草稿」には見られなかった視点があると廣松によって指摘されている。私有財産の前提から論を運ぶ国民経済学を批判したマルクスにおいては、先に挙げた「労働の疎外」を私有財産から説明することはできない。では「労働の疎外」はどのようにして発生しているのか。マルクス自身も問いとしては設定しているものの、「経済草稿」では明確な回答

を提示しなかった(p. 243) (Marx 1968 /1959: 243) . 『ドイツ・イデオロギー』において廣松が見出したのは、この問いに対する解答である。それが私有財産の発生と疎外された労働、この2つそのものの成立を可能にする「分業」の形態である。

「『ドイツ・イデオロギー』では、もはや、いわゆる"主体=客の弁証法"が直接的な形では採られていないことである。すなわち、ここでは、個々の主体と客体との直接的な関係からではなく、諸個人の社会的協働関係の自然生的な在り方から一社会的活動の自己着 Sich-fcst-sstzen」が説かれており、要言すれば、人間から連立な事象的な力ないし形象として減少するところのものは、実は、諸個人の自然生的な協働力ないしは協働関係なのだということが対自化されている。」
(廣松 :247).

このように見田の存立構造論に見られる態度は、全面的に廣松渉を通じたマルクスの議論を受容したものとして捉えることができるように思える。ただ、この内容における受容は完全なものとしては捉えられず考察を必要とする。それが見田の提示する ROS 図式である。R, O, S がそれぞれ「関係性の特定形態」、「物象化された対象性」、「疎外された主体性」として示されるが、特に O, S の記述が「主体」と「対象」として対峙されていること、そして「物象化」と「疎外」が対峙されているものとして提示されていることは、マルクスから廣松、見田へと主張が引き継がれていく中で、明らかに変化したものとして示されているからである。少なくとも、廣松のいうところの物象化論へと移行した後の一マルクスにおいては見田に見られるような「疎外」と「物象化」は明確な対比の構図は見られない。「『疎外論』から『物象化論』へ」の中で、明確な対称性を持っていると見られる議論は以下のものに限られる。

新しいより合理的な社会環境を実現しうべき時点にさしかかっており、現存の生産関係（交通関係）が生産力にとって桎梏に転じていることの屈折した意識投影として現存の不合理性が“非本来性”という形で意識され、理想として表象される将来のあり方が、“本来性”という形で意識されているのである（廣松 1991 : 248）。

ここでの廣松の議論は「経済草稿」に見られた、「類としての人間」を暗に想定することで生じる「本来性」と「非本来性」を認める態度を批判している。ここでいう「非本来性」が意味する状態は「経済草稿」においてマルクスが〈疎外論〉のもと理解を行った上での「疎外」のあり方である。本来性については、その回復として提示されている。た

だ、その内容が交通関係において理解されることなく提示されている、というのがここで
の廣松の主張である。ただ、この内容は、『ドイツ・イデオロギー』の中で展開されたイ
デオロギー批判を再整理したものであり、それが故に、虚偽的な理解への批判が先行し、
分業、もしくは交通関係の現状がどのような帰結をもたらすかについては具体的に説明さ
れていない。加えて、文章の中で示されるように、交通関係は「現状」であり、「本来
性」は未来の対象であるものとして整理されている点もこの対称性についての議論の中に
含まれている。これも同様に『ドイツ・イデオロギー』の主張を議論に組み込んだために
生じているものとして整理できる。この「本来性」と「非本来性」の議論を捉え直したの
が、見田における「物象化された対称性」と「疎外された主体性」として考察できる。廣
松は、分業から生じる現状を不合理的な本来性が損なわれた状態として「非本来性」とし
て捉えたが、この内容は見田において、「疎外された主体性」として、これを捉えたので
あろう。

第3節 サルトルの影響

存立構造論におけるサルトルの影響は主にⅠの「現代社会の存立構造」に見られる。こ
こではⅡにおいて展開される『資本論』の物象化論的な読解の視座そのものを確認するこ
とを主題としている。そこで社会の唯物史観的な変遷が提示されるわけだがそれを見田
は、マルクスに直接由来する用語を用いるのではなく、サルトルの『弁証法的理性批判』
の用語を用いて説明している。それが先までの議論における「相剋性」に対応する「集列
性」と、それによって成立する「^{ゲゼルシャフト}集合態」（真木 1974：3）である。この用語は見田自
身によってサルトルの『弁証法的理性批判』由来の概念であることが言及されている。こ
の内容については、前章で確認した、「他者」および「稀少性」の概念が直接に関わって
いる。

「集合態」は、「諸個人は「私」的にのみ主体的でありそれら多数の、相互に外的な指
摘実践の相互干渉（集列性）の全体系が、結果的に諸個人の意思から独立した諸法則を貫
徹せしめる、このメカニズムを媒介として、このような諸「法則」の構造として
^{オブジェクティブ}対照的＝客観的に「社会」が存立する場合」（真木 1974：3）として見田によって説明
されている。この内容を論ずるにあたって、参照されているのがサルトルにおける「集合
態」の概念である。サルトルはこれを「他者」の存在が前提とされたことにおいて説明す
る。『弁証法的理性批判』における集合態の説明において、サルトルは、このような社会
自体が対象として認識できる状態をそもそもの諸個人の連帯の結果として見るのではな
く、それを後景化した、非判断性のうちから存在していることをその定義としている。そ
の際に生じているのが「文化的統一の非有機的転置」（Sartre 1960：301）として説明

される、一般的個人としての「他者」の産出である。「この場合、まとまりのない多数の行動する個人はそこにおいて〈他者〉というしるしのもとに、〈存在〉における現実的統一として、即ち受動的綜合として生み出される」（Sartre 1960：303）、とあるように、サルトルにおける「まなざし」にも通づるような「他者」についての考察が「集合態」そのものの機制に関わっている。

この内容が見田の考察に引き継がれている。ただ、これについてはマルクスにおいても同様な考察が行われている。今井（2023）の議論によれば、マルクスが初期に描いた『経済学・哲学草稿』では、資本家という外在的な個人がぼんやりと「他者」として登場し、疎外は主に一者（私）の内的な苦悩として描かれる。しかし『ミル評注』において貨幣交換＝交通が問題化されると、労働者どうしが互いを私的所有物としてのみ認識せざるをえない関係が強調され、そこでは「他者」が「私の物」を欲望する。私もまた「他者の物」でしかない形で疎外を生む。さらに『ドイツ・イデオロギー』になると、分業による私的労働が交換を高度化し、社会的連関が物象化した「疎遠な力」が人々を拘束するという二次元的な視座が示される。そして最終的に『経済学批判要綱』や『資本論』では、労働力そのものの外化が焦点となり、蓄積した資本という物象的な社会的力が「他者」として労働者を全面的に支配する段階へ至る。つまり、労働者は自らの生成＝陶冶過程さえ資本に明け渡すことになり、資本そのものが「疎遠な力」として労働者の主体性を奪う決定的な形で論じられる。

このようなマルクスにおける「他者」の議論を見田はサルトルの考察から引き出したものとして考察できる。マルクスの、特に『経済学・哲学草稿』にみられるような疎外論の議論から把握し直したものとも解釈できるだろう。サルトルはこれを集合の歴史的考察における「集合態」的にみられる時代拘束的な現象の1つとして「他者」の存在を捉えた。

生産物の形をとった労働者の外化は、かれの労働が対象となり外的存在となるという意味をもつだけでなく、それがかれの外に、かれから独立した疎遠なものとして存在し、独立した力としてかれに立ち向かうようになることを、いいかえれば、かれが対象に投入した生命が疎遠なものとしてかれに敵対することを意味する『経済学・哲学草稿』長谷川宏訳、光文社古典新訳文庫、p.93)

このような内容の元、存立構造論では、明確に「他者」に相当する記述が行われている。具体的には、このような「他者」は、社会が収奪的な原理から、共同体へ、そして市民社会的な段階へと唯物的に発展して行く中で、どの段階においても、生産力の増大に伴う「他者」との接触が、異なる社会状態への移行の契機となっている。

〈人間・対・自然〉の範式を存立せしめる第一次の媒介化(手段性の回路)の確立から、〈個人・対・社会〉の範式を存立せしめる第二次の媒介化(他者性の回路)の確立までには、ながい歴史が介在している。そこには人間が、すでに対自然存在でありながら、いまだに内社会的存在あるような、すなわち、自然内存在としてのあり方はすでに媒介的でありながら、社会内存在としてのあり方はいまだ直接的であるような、本面的所有の諸時代が介在している(中略)。交通の回路ということが、〈譲護をとおしての領有〉として明確に形態化するのには、各個人が直接に共同態のためにではなく、私的な目的のためにおこなう私的な労働の成果を、私的な所有としてまず第一次的に所有し、次いでこの私的な所有を、他の私的な所有者と交換することをとおして。自己の欲求の対象物を二次的に所有するという、〈私的所有の関係〉においてである。(真木・大澤 2014 : 93)

上記は存立構造論における集合態の発生の契機を「相互に自立した他者(または集団)、との交通関係という、〈他者性の回路〉」(真木・大澤 2014 : 86)の発生に求められることを主張した考察のうちの一部である。マルクスにおいては第一篇の二節に書かれる交換過程そもそもの発生の議論として、以下のように論じられている。

かの調度きるべき物の私的有者として、またまきにこのことによって相互に相類立せる個人として、対することが必要であるだけである。だが、このような相互に分離している関係は、一つの自然発生的な共同体の成員にとっては存しない。それがいま家父長的家族の影画をとろうと、古代インドの村やインカ国々の形態をとろうと、同じことである。商品交換は、共同体の終わるところに、すなわち、共同体が階の共同体または他の共同体の員と商騰する点に始まる。

(Marx・Engels 1867 /1969 : 158)

このようにマルクスにおいても他の共同体との接触は論じられている。ただ、他の共同体との接触をめぐる議論については、マルクスと見田の双方に共通する観点があるものの、その解釈のあり方は決して同一ではないように見受けられる。たとえばマルクスは、『資本論』第一篇の交換過程に関する論考の中で、共同体同士が互いに接触してはじめて商品交換が成立するというプロセスを描写している。そして、このような他の共同体との境界面において、金銀をはじめとする一般価値形態としての貨幣の流通圏が拡大していくことが、社会状況を変化させると論じている。

一方で、見田の存立構造論においても、同様に「他の共同体」との交通や接触が、新たな社会状態への移行を促す大きな契機として取り上げられている。ただ、見田はこれをマ

ルクス流の「価値形態」の拡大としては論じていない。むしろ個々の主体が自らの行為回路をいかに認識し、それに即していかなる「社会的性格」を形成するに至るか、という視点に重心を置いている。すなわち、存立構造論では、単に貨幣や商品が拡大していく交換過程そのものに注目するのではなく、個人が「他者」と遭遇し、それを意識していく過程で、その主体自体の内面がどのように形成されるかが問題となる。

言いかえれば、マルクスは貨幣的交換の拡大が、分断された共同体同士を接合する主要な触媒になると述べる一方で、見田はサルトルの「相剋性」や「まなざし」の議論を繰り返しながら、「他者との接触」という出来事が個人の行為や欲求を媒介し、そこに「社会的性格」としての主体性が立ち上がる仕組みを探究しているのである。とりわけサルトルが論じたように、相手方の欲求や視線が主体の行為を拘束する「相剋性」の構図を見田は強調し、それを「交通」の経済的な議論から広げ、「社会的性格」の形成の議論と結びつけている。

ここにはサルトル受容の特色が見られる。すでに述べたように、サルトルの「まなざし」や「相剋性」は、他者との関係が自己の内面と行為選択を決定的に規定する構図を示すものであるが、見田はこれを「他者」との接触を通じた「社会的性格」の形成として捉え直す。その結果、マルクス的な価値形態の拡張が担っていた経緯を、個々の主体的側面から論ずることができた。「集合態」の成立を、マルクスのように貨幣や財の交換形態をベースとして見るのではなく、他者性の受容と「まなざし」をめぐる視点から考察している点に、見田のオリジナリティがあるといえよう。

上記は集合態の発生についての議論だが、その後の展開である収奪的な社会、マルクスでいう封建的な社会の発生の契機についても、以下のように他集団との接触から示されている。

対・自然関係および対・他共同体におけるこのような緊張は、共同体の一部の富を個別諸成員による直接の享受から控除して、不時にそなえての備蓄ならびに、共同の諸活動のための共同の手段として、直接に共同的な形態で蓄積することを要請する（真木・大澤 2014：132）。

交換の成立には「他者」自体の接触がその契機であったが、ここでは他の集団との接触、ないし認識が、収奪に基づく、共同体的な社会の発生を説明する要因となっている。

以上が、「他者」と「集合態」の議論の関連性についてだが、「稀少性」についても同様に、「集合態」の概念の受容にあたって関連を持っている。確認した限りでは、「稀少性」は用語自体としてはマルクスにおいて用いられておらず、サルトルが『弁証法的理性

批判』を論ずる上で、設定された用語だとみられる。堀田(2016)によれば、サルトルは『方法の問題』の中でマルクスを再検討する過程で「稀少性」という概念を取り出し、それを自らの議論の基礎づけとして解釈したと考えられる。もともとマルクスは「経済学批判」の有名な「序言」で物質生活の生産様式が社会の諸関係を規定すると述べるが、そこに財の「稀少性」という唯物論的要因が深く関わっていることを指摘する。すなわち、人間の欲求に対して生活資料が十分に行き渡らないという制約が、労働の必要性和同時に疎外や支配の構造を生み出すのである。サルトルはこのマルクスの唯物論的視点を読む中で、稀少性の克服がまだ果たされていないかぎり、マルクス主義は社会思想の不可避な地平として機能し続けると理解する。逆に言えば、稀少性が完全に解消され、「各人がその能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」（堀田 2016：55）という Kommunismus の理想が実現されるという。こうした構図を踏まえれば、サルトルはマルクスの稀少性論を自身の議論に取り込むことで財の欠乏という根本的前提と疎外構造との接点をより鮮明に示そうとした、と堀田は論じているわけである。

この内容を踏まえれば、見田は「他者」と同様に、「稀少性」においてもサルトルがマルクスから見出した視点を援用してマルクスの考察を行っているといえよう。

第4節 「3つの視点」の統合

今回の主題からみれば、廣松渉を中心とした日本のマルクス研究と、サルトル、この2つの考察のもとで、マルクスの受容としての存立構造論は展開されたと言える。ではここではどのような問いが問題となり、存立構造論そのものの考察が必要とされるのだろうか。そこで示したいのが、存立構造論は価値意識論において展開されていたマルクスの受容としての「3つの視点」の統合の結果として読むことができる、という点である。

3つの視点は第4章において、価値意識論におけるマルクスの受容の内容の類型として筆者が提示したものである。それが功利主義への批判、欲求の「無限性」、価値の「外在性」である。ただ、第4章第4節でも確認した通り、その内容は価値意識論の中で、個々に論じられた問いであり、これ自体は今回のようなマルクスの受容としてしか共通な項を持たないものであった。また、いずれもマルクスを実際に援用しながら論じているものの、内容自体は示唆的なものにとどまっていた。つまり価値意識論を論じた時点ではマルクスの受容は断片的であり、どのような形で受容が行われていたかを明確に示すことはできない。

ただ、この「3つの視点」は第5章、および第6章において確認された通り、実際の社会調査の考察に援用される形で具体的に論じられるようになった。第5章では、価値意識論でも提示されていたマルクス由来の「G-W-G'」の図式を援用する形で、媒介的な欲

求を追求し続ける人々を社会学の視点から考察していた。これは価値意識論における欲求「無限性」についての具体的な考察である。またこの内容について見田はその状況を人々の「不幸」に対して用いることもあれば、それ自体に破綻を見出す考察も行っていた。このことから功利主義に対する批判的な態度もとっていたことがわかる。つまり社会意識論においては功利主義に批判的な態度と、欲求の「無限性」の2つが統合して論じられたこととなる。これはマルクス受容という本論文の主題から捉え直せば、マルクス由来の考察を、見田は実際の考察で援用しているために、一定のマルクス受容を行っているものと示せる。

そしてこれは、経済的な価値や地位の追求が「都市」という単位のもとで発生していることが第6章において示されている。論じた論文のうち、初めの2本ではそれは「憧れ」として、人々に自由を求められるであろう、という希望を抱かせる概念として「都市」を論じていた。ただ、この内容が3本目の「まなざしの地獄」では、「都市」は「憧れ」でもありながら同時に「まなざし」として、自己を形成する概念であることが示された。この点においても、同様に功利主義に批判的な態度と、欲求の「無限性」の2つは継続して論じられており、マルクスの受容の過程として論ずることができる。

そして第8章においてサルトルを介したマルクスの受容を通じて、価値の「外在性」についてその内容にサルトルの影響が見られることを考察した。価値の成立が社会における「他者」が存在しているところから論じられるのであれば、価値がどのように「外在性」を持つか、その問いは価値意識論では解答が保留されていたものの、サルトルの受容を通じて論じることができるようになったものと考えられる。

このような議論の展開において、マルクスの受容は見田において行われてきたわけだが、存立構造論において、その内容は体系的な考察を持ってして受容されることとなる。廣松を中心とした日本のマルクス研究やサルトルが存立構造論の考察に影響していることはここまで確認した通りであり、その内容がこの時点における「3つの視点」を統合した形でのマルクスの体系的な受容として示される。

価値意識論において示されていた通り、「外在性」の議論は「物神化」の問題として提示されている。これは存立構造論においては「物象化」に該当する。「物象化」は見田において、「」として提示されており、これは先の第2節で確認した ROS 的な関係を基礎に置く廣松渉由来の捉え方である。つまり、価値の「外在性」の問いは廣松の物象化論を通じて、解答が示される。「物象化」がどのようにして社会の中で発生するのか、その問いに対する考察こそが、見田における価値の「外在性」に対する解答となる。

物象化は史的唯物論の中でもいくつかの段階の中で説明される。

物象化そのものの様態については廣松の章で確認した通りに、主体の対象化と客体の主体化として示される、ROS 図式に基づいた主体と客体における主客の転倒として説明される。つまり客体が主体となり、その事実自体が認識する我々にとって自明なものとして説明されることになれば、その社会関係において物象化は生じていると言える。

この内容自体が、価値がその事実として存在することを指す、価値の「外在性」の議論に対応する。存立構造論に準えられれば以下のようになるだろう。価値意識論に示される価値が「主体の欲求を満たす客体の性能」として定義されている時、この場合、価値は主体からみて、その客体として、一定の力能を持つものとして、自明に、認知されていることが、価値が「外在性」を持つという状況に対応するのである。言い換えればこれを客体の性能として、自らの欲求を満たすように価値を認識できなければ、そのような価値が物象化しているとはいえず、また、「外在性」を担っているともいえない。

このように価値の「外在性」については物象化論に並べて論じられる問いである。では、どのようにして物象化するのか。今度は、物象化が生ずる条件そのものについて考察をおこない、「外在性」の問いについての考察を行いたい。

存立構造論において、物象化、および物神化は上の廣松の議論の考察が行われた第Ⅰ部に限らず、具体的に物象化の様子を描いた第Ⅱ部においても論じられている。具体的には以下の3つの水準それぞれにおいて示されている。

- ① 「諸共同体内部における人格的な支配関係」（真木・大澤 2014 : 117) における物象化
- ② 「収奪関係がほぼ対等の多数の諸個人相互の間で相互的に成立する」（真木・大澤 2014 : 118) 場合における物象化
- ③ 「労働する主体そのものが(中略)他者の所有に内化される」（真木・大澤 2014 : 119) 場合における物象化

以上の内容を確認しながら、価値の「外在性」が生ずるところの物象化の水準についての考察を行いたい。

1つ目の「諸共同体内部における人格的な支配関係」における物象化は、見田によって『資本論』では論じられることのなかった物象化の水準であることが指摘される。それが、私的所有が前提となった市民社会の手前にある、共同的所有を前提とした共同体の原理である。ここでは、先に論じたような「他者」としての共同体の認識において正当化された共有財の所有から、共同的所有が示される。ここでは諸個人の労働は、一定の対価を得ることなく、共有物として労働の成果物が文字通り共同体に「収奪」される。この場合、共同体は、1つの媒介された回路であり、この契機によって共同体は「収奪」を以てして、1つの客観性を帯びることとなる（真木・大澤 2014 : 127-30）。「彼ら自身の関

係の相対性を、どの主体の意思からも独立した対照的な運動の法則性として存立せしめると共に、この連関の項がなす個々の主体を、この物象化された法則の客観性に従属せしめる」（真木・大澤 2014：118）。これが1つ目の水準として示される「媒介された共同性」に生ずる物象化である。ここから共同体を担うところの権力者が私的所有としてその共有財の規模を増大させるところから、弁証法的に2つ目の物象化へと議論が展開される。

その次の水準として示されるのが、2つ目の「収奪関係がほぼ対等の多数の諸個人相互の間で相互的に成立する」場合における物象化である。ここでは1つ目の物象化において生じた収奪的な私的所有の発生が、それ自体、1つの客観的な法則として存立せしめることによって、2つ目の物象化が見出される。これはマルクスにおける『資本論』の第一篇章三節に当たる「価値形態または交換価値」に当たる内容であり、「一般的等価形態」の発生としてこの内容が論じられた。見田によれば、1つ目から生じた私的所有他者において、それが「他者」においても認められるところから、商品としての「交換」が生ずるといふ。これは私的所有そのものが前提となった時にはじめて発生するために、1つ目の物象化の際には見られなかった。この交換は、自らの生産物が、他者の生産物において等価であることの意味を持つ。これが自らの生産に先立つことなく他者の生産物に企図をいたすようになると、見田における「物神化」が生ずるようになる。「関係性の位相でとらえれば、上衣生産者の労働を領有すること、自己の欲求を他者の労働によって充足するところにある（中略）すなわち彼自身の意思するところは、純粹の欲求主体としての自己に、純粹に労働主体としての他者を関係せしめることに過ぎない」（真木・大澤 2014 144-5）。欲求が客体を媒介として充足されざるを得ない状況において物神化が生ずるとも言えるだろう。この物神化こそが、「収奪」な社会関係を止場したところにより生じる、2つ目の「収奪関係がほぼ対等の多数の諸個人相互の間で相互的に成立する」場合における物象化として論じられる。ここから改めて「収奪」が生ずるところで3つ目の水準の物象化が展開される。

3つ目が「労働する主体そのものが他者の所有に内化される」場合における物象化である。

このように市民社会は、その本源的形態においてすでに、〈疎外⇨収奪〉の関係をその潜勢的契機として内包している。すなわち、この社会形態における経済関係の原基形態をなす〈譲渡を通しての領有〉は、第一に自己の労働による、疎遠な他者の欲求の充足であり、第二に自己の欲求の、疎遠な他者の労働による充足である。それはこのように潜勢的には疎外であり収奪であるが、それが直接に

顕勢的な〈疎外⇄収奪〉の関係として現れないのは、第一にそれが相互的であり、第二にそれが普遍的であって、特定の個別的他者に対してではないからである（真木・大澤 2014：158）

このように見田によって論じられている通り、〈疎外⇄収奪〉の関係は共同体において見られた通りに潜在的であった。弁証法的視点であり、これが3つ目の水準である「労働する主体そのものが他者の所有に内化される」場合における物象化へとつながっていく。

それが「労働力の商品化とこれに基づく余剰価値の生産」である。市民社会における等価交換は常に等価であった。ただ、生産における必要労働時間としての労働力と対価の交換は、余剰労働時間を含まない交換であるために、共同体の原理に見られた「収奪」の再発として捉えられている。

ここから3つ目の水準としての、「労働する主体そのものが他者の所有に内化される」場合における物象化が説明される。初めは協業の形を通じて余剰価値による収奪が行われるが、固定資本としての機械が産み出されることにより、労働者は過程を規制する主体ではなく、機械に準ずる客体として機能するようになる。この状況においては人々は、自らの労働力を余剰価値が差し引かれた価値に合わせて生活のリズムそのものを規定することとなる。この状況では労働者と資本家の対比として階級が置かれることとなり、これは市民社会において一度止場された、階級社会の再物象化として説明される。ただ、ここでは資本家においても物象化が見出される。それが一般価値形態である貨幣のそれではなく、「資本」の物象化である。集列性のメカニズムにおいて、「資本」自体が法則として、存立せしめることによって物象化が行われている。

以上三つの物象化の水準は、それぞれにおいて「価値（あるいは富）の成立過程」と「その社会的外在性」が異なる位相で現われることを示している。共同体的所有としての第一の水準では、共同体自体が、成員の労働成果を自明の権力として取り込む形で外在化が生じ、商品交換による一般価値形態としての第二の水準では、私的所有をもつ対等な諸個人の交換から生まれる貨幣形態が普遍的な社会法則として人々を規定する。さらに資本への労働力の従属としての第三の水準に至ると、外在化された価値が労働主体そのものを所有／支配する段階へと弁証法的に展開していく。

このように整理すると、価値意識論で示されていた価値の外在性という問いが、物象化論を導入することで歴史的・構造的に捉え直されることがわかる。つまり、価値は単なる抽象概念ではなく、それぞれの生産・交換・所有の形態ごとに具体的な権力構造や交通関係を伴いながら外在性としての形態をとっていることとなる。存立構造論に従えば、価値

が物象化し、価値意識論として客観的に論じられていることこそが近代的な歴史的産物であるといえよう。見田が存立構造論で提示する「三つの水準」による物象化の把握は、まさに価値の「外在性」がどのように段階的に強化され、人間にとって自明なものとして存立するかを示す試みと言える。ここに、価値意識論の段階ではまだ不十分であった価値の「外在性」の成立の機制が、統合的に説明される。言い換えれば、価値の外在性は、唯物史観的な立場によってその説明を行うことができたともいえよう。

第5節 章のまとめ

第8章では、見田宗介の著作『現代社会の存立構造』におけるマルクスの受容を、サルトルおよび廣松渉の議論を踏まえて考察した。存立構造論は、真木・大澤（2014）が評価するように、『資本論』に対する創造的読解であり、見田自身の理論的生涯の総括として位置づけられる。

第1節では、日本におけるマルクス受容の動向を概観した。1965年から1975年にかけての日本マルクス研究は、多様化と自由化が進みマルクスの読解に新たなアプローチが台頭した。その中でも廣松渉の物象化論は、従来の主客図式を超克し、社会関係の総体としての物象化を強調するものであり、見田はこの潮流を応用してマルクスの理論を展開した。他にも、見田は60年代のマルクス研究を基盤にしつつ、存立構造論以前の議論では踏まえていなかったマルクス受容の変化を反映させている。

第2節では、廣松渉の影響を詳細に分析した。見田は『資本論』から「社会」の認識を導出し、ROS図式を提示することで、廣松の物象化論を独自に展開した。

第3節では、サルトルの影響を検討した。見田はサルトルの『弁証法的理性批判』の用語を用いて「集列性」および「集合態」を説明し、これらが「他者」および「稀少性」の概念と結びつけながら存立構造論を展開した。

第4節では、価値意識論における「功利主義への批判」「欲求の無限性」「価値の外在性」という三つの視点が存立構造論で統合され、マルクスの受容を体系的に行われたことを示した。特に、「物象化論」を通じて価値の外在性が歴史的・構造的に説明され、見田の理論が包括的なマルクス受容として完成されている点が強調される。これにより、価値意識論で未解決だった「価値の外在性」の問題に対し、見田は物象化論を介して具体的な解答を提示した。

以上により、見田宗介は廣松渉とサルトルの影響を融合させながら、マルクスの理論を独自に再構成し、存立構造論として体系化することで、価値の外在性問題に対する深い洞察を提供していることが明らかになる。

第9章 見田は何を論じたかったのか

本章では結論を提示するに先立ち、見田はそもそも何を論じたかったのか、そしてそれをマルクスの受容として考察することにどのような意味があるのかを最後に検討したい。

まず、見田の論点を要約すれば、戦後日本社会に生きた社会学者として、いわゆる「価値」なるものが客観的で恒久的な基盤を必ずしも持たず、むしろ人々がそれを際限なく追い求めてしまうがゆえの虚無的な様相を明らかにすることにあつたと考えられる。ここでいう「価値」は、単に商品経済の交換価値にとどまらず、学歴や地位、さらには人間関係への承認欲求など、多種多様な形で現れるが、それらが本来的に揺らぎやすく、恒久的な正当性を持たないまま人々を拘束していくという点が、見田にとって問題意識の核心を成していたように思われる。「価値意識の無反省な反映にすぎない」（見田 1966: 12）と論じられていたように研究の態度としても、見田はそのことを意識していたといえよう。

この観点からすれば、価値意識論で提示される功利主義的な態度への批判や、欲求の無限性の問題、さらには価値の外在性という視点はすべて、そうした価値の揺らぎとそれに翻弄される人間の様相を提示するためのものと解釈できる。それは資本主義社会の制度的矛盾というマルクスの議論を引用しながら、より広範な社会現象としての、社会意識や個人の欲望追求、集団への同調や都市への憧れといった多岐にわたる領域を包括的に論じようとするものであつたと考えられる。

では、これがマルクスの受容という形で考察されることでどのような意義を持つのか。見田は、マルクスが主題とした生産関係や階級構造を踏まえつつも、『資本論』の枠内だけでは十分に扱われなかつた価値と人間の間を論じたのではないかと思われる。いわば、価値の成立条件とそれが個々人に及ぼす効果とを一貫した弁証法の中で整理し、最終的に「存立構造論」の射程へとつなげる役割を果たしたとみることができる。特に、価値が人々の行為を媒介する仕組みが、社会的諸関係の総体としていかに物象化するのかという視点が、見田独自の貢献として示唆される。

さらに言えば、見田は価値意識論や存立構造論というマクロな視座を取りながらも、同時に社会意識論においては徹底して個人の悩みや欲望を取り上げてきた。そこには、全体構造の説明に回収されがちな唯物史観を、個々人の経験的実感という観点から捉え直す試みがあつたように見える。その結果、資本主義社会の根本的な矛盾を示すと同時に、それが日常の欲望や孤立と結びつくメカニズムを論ずることができたといえよう。

第10章 結論・今後の展望

結論は以下の通りである。

本論文では、まず第4章において価値意識論におけるマルクス受容を功利主義への批判、欲求の「無限性」、価値の「外在性」という三つの視点から整理した。これらはいずれもマルクス理論の断片的な引用にとどまり、まだ統合には至っていなかった。ただ、第5章、および第6章で論じた社会意識論においては「非本来的な価値の追求」として連動し、学歴や地位などが貨幣と同様に自己目的化してゆく様相がさらに深められた。とりわけ第5章では資本主義社会の「手段の自己目的化」の論理が、人々の「不幸」や「疎外」を説明するために用いられ、第6章では「都市性」の導入によって、人間の欲望や憧れが空間的・構造的に組み込まれる仕組みが示された。これら一連の議論によって、価値意識論の「三つの視点」のうち功利主義批判と欲求の無限性の2つが社会意識論の領域で統合される一方、価値の「外在性」については保留されていた。そこで第7章で考察したように、サルトルを介したマルクスの受容が、「他者」や「希少性」の概念を導入し、価値の外在性が社会や他者との関係の中でどのように生成されるかを論じる契機となった。第8章では、その発展として存立構造論を対象に、廣松渉の物象化論との接合が確認される。見田は物象化の論理を用いつつ、資本論を歴史的・構造的に読み解き、価値が外在性を獲得するプロセスを三つの水準で展開した。これにより第4章以来の「外在性」問題を体系的に説明し、初期からの「三つの視点」を総合することに成功したといえよう。

結論としては、第一に見田は初期からマルクス理論を取り入れ、価値意識論に始まる多様な社会調査や都市論を踏まえつつ、サルトルや廣松渉の議論を媒介として独自の存立構造論を論ずるに至った。その過程で、功利主義への批判、欲求の無限性、価値の外在性という三つの着想は、社会意識論と存立構造論にも引き継がれている。第二に、マルクスの受容には日本のマルクス研究の潮流とサルトルの「他者」論が媒介していることが明らかになった。単なる読解にとどまらず、見田はマルクスの問題意識を現代社会の学歴、地位、都市などの具体的な調査対象へと広げ、唯物史観が扱わなかった個人の主体性や内面にまで射程を広げた。その結果、価値意識論では未解決だった外在性の問題を物象化論の立場から再構築することにつながった。ゆえに見田におけるマルクス受容は、初期に提示された三つの視点を經由しながら、存立構造論で体系的に行われたと結論づけることができる。

本研究の貢献、限界については以下の通りである。先行研究の検討において、見田とマルクスの関係について、体系的な考察こそ行われてこなかったものの、様々な側面から指摘が行われてきたことが示された。ここではマルクスの受容を主題として、その指摘に対して、体系的な考察を通じて応答できていることが見田の議論における貢献であると考え

る。さらに、必ずしもマルクスを言及した文献に限らず、社会意識論における見田の主張も文献の対として、受容の過程の中で考察したことによって、マルクスの受容として、その内容が実際の社会調査にも援用されていることが示された。これらは先行研究への応答として一定の貢献を示すことができたといえよう。ただ、限界としては、主題設定そのものが見田におけるマルクスの受容、と限定されていることによって、これらが社会学の中で見田におけるオリジナルな考察なのかについて検討できていない点が挙げられる。これは実際に他の同時期の社会学者、思想家との比較を通じて明かすことができるであろう

また、考察を続ける中で廣松とサルトルの考察が見田のマルクス受容にあたって影響があることが明かされた。ただ、本論文ではその内容についてマルクス受容に限定して扱ったため、廣松とサルトルの受容が見田においてどのようなものだったかを示すには限定的な考察しかできていない。そのため、廣松とサルトルの受容を、体系的に示すためには、それぞれを主題として改めて設定して検討する必要があるだろう。

謝辞

本論文は小熊先生、そして小熊研究会の皆様のおかげで書くことができました。感謝申し上げます

参考文献

- 浅野 慎一, 2000, 「マルクス・エンゲルスの「都市―農村」論に関する考察」『行政社会論集』12(4): 21-54.
- 越智 昇, 1972, 「コミュニティ論序説―コミュニケーションからの試論―」『横浜市立大学論叢. 社会科学系列』23(3,4): 1-34.
- 呉 先 珍, 2021, 「時間からの疎外をいかに描くべきか; 真木悠介と E.レヴィナスの時間論の比較検討を通して」『現象学と社会科学』4: 88-102.
- 長谷 正 人, 2016, 「見田宗介における「相乗性」という限界
―『近代日本の心情の歴史』を読み直す」奥村 隆編『作田啓一 vs. 見田宗介』弘文堂, 75-101.
- 廣松 涉, 1991, 『マルクス主義の地平』講談社.
- 平田 清 明, 1971, 『経済学と歴史認識』岩波書店.
- 堀田 新五郎, 2016, 「サルトルとマルクス主義」『奈良県立大学研究季報』27(2): 43-64.
- 福留 久 大, 2018a, 「『資本論』の沙翁引用: 価値対象性という概念」『経済学研究』85(2/3): 67-87.
- ―2018b, 「『資本論』の沙翁引用: 価値対象性という概念」『経済学研究』85(2): 67-87.
- 小林 一 穂, 1983, 「真木悠介著 現代社会の存立構造」『社会学評論』34(3): 386-9.
- 飯田 哲 也, 2014, 『現代日本の社会学史』学文社.
- 井上 芳 保, 1985, 「疎外論の展開と現象学的アプローチ--「主体性の疎外論」の批判的検討のために」『茨城大学政経学会雑誌』(50): 41-62.
- 今井 里 穂, 2023, 「[論説] マルクス解釈としての疎外論の発展--一次元的理解から四次元的理解へ--」『社会システム研究』26: 53-71.
- 今村 仁 司, 1978, 「マルクス研究の新動向-思想」『経済学史学会年報』16(16): 12-9.
- 片上 平二郎, 2016, 「「移行期」の思想―作田啓一と見田宗介の「個人」への問い」奥村 隆編弘文堂, 102-44.
- 真木 悠 介, 1969, 「人間的欲求の理論--人間解放の理論のために」『展望』(131): 16-45.
- ―1971a, 『人間解放の理論のために』筑摩書房.
- ―1971b, 「コミュニオンと最適社会--人間的未来の構想」『展望』(146): 10-42.
- ―1974, 「現代社会の存立構造物象化・物神化 自己疎外」『思想』(587): 2-30.

- 1977, 『現代社会の存立構造』筑摩書房.
- 真木 悠介・大澤 真幸, 2014, 『現代社会の存立構造』朝日出版社.
- Marx Karl, 1858, 『Zur Kritik Der Politischen Ökonomie』Franz Duncker. (武田隆夫・遠藤湘吉・大内力・加藤俊彦訳. 1995. 『経済学批判』. 岩波書店)
- Marx Karl・Engels Friedrich, 1867, 『Das Kapital: Kritik an Der Politischen Ökonomie』Meissner. (向坂逸郎訳. 1969, 『資本論(一)』, 岩波書店)
- 見田 宗介, 1960, 「純粋戦后派の意識構造」『思想の科学会報』(26): 5-8.
- 1963a, 「価値意識論の構想—人間の〈目的〉ないし〈幸福〉の問題に関する経験科学的諸アプローチの統合のために—」『思想』469: 78-91.
- 1963b, 「現代における不幸の諸類型: 疎外〈日常性〉の底にあるもの」北川 隆吉編『疎外の社会学』有斐閣, 21-72.
- 1963c, 「貧困の中の繁栄」『現代の眼』4(12): 46-53.
- 1964, 「「日本人の理想的人物像」」『中央公論』(922): 146-60.
- 1965a, 「文化の理論と価値意識」尾高 邦雄・福武 直編『二〇世紀の社会学』ダイヤモンド社, 79-94.
- 1965b, 「新しい望郷の歌--1960年代の社会心理状況」『日本』8(11): 214-9.
- 1965c, 「「文明開花」の社会心理学」『展望』(84): 78-91.
- 1966a, 『価値意識の理論: 欲望と道德の社会学』弘文堂.
- 1966b, 「〈人生観〉の社会学」『潮』(72): 114-27.
- 1967, 「高校生の現代職業観」『中央公論』82(5): 198-207.
- 1969, 「失われた言葉を求めて--想像力の陣地の奪還〔現代学生の精神状況〕」『世界』(279): 64-72.
- 1971, 「何に生きがいを感じるか--1 仕事, 2 ホーム, 3 レジャー(未来展望講座)」『日本経済研究センター会報』(143): 50-5.
- 1973a, 「欲求の解放とコミュニオン」『朝日ジャーナル』15(1): 18-24.
- 1973b, 「新しい望郷の歌: 現代日本の精神状況」宮本 忠雄編『現代人の精神構造』130-7.
- 1973c, 「まなごしの地獄--都市社会学への試論」『展望』(173): 98-119.
- 1991, 「〈ふつうの古典〉としての「資本論」」『思想の科学』(142): 39-40.
- 望月 清司, 1973, 『マルクス歴史理論の研究』一橋大学経済研究所.
- 西澤 晃彦, 2015, 『貧困と社会』放送大学教育振興会.
- 大澤 真幸・吉見 俊哉・鷺田 清一・見田 宗介編, 2012, 『現代社会学事典』弘文堂.

- 奥村 隆, 2016, 「< 明晰> なる反転: 見田宗介= 真木悠介におけるその拠点と陥穽について」『現代思想』43(19): 97-113.
- 小原 仁, 1980, 「物象化論に関する一考察」『ソシオロジ』24(3): 77-88.
- 小川 正, 1973, 「授業研究の方法論: 「人間疎外」からの脱出をめざして」『教育科学セミナー』5: 1-15.
- 小形 道正, 2016, 「まなごしの誘惑: 二つの名を結ぶ思考」『現代思想』43(19): 180-93.
- Sartre Jean-Paul, 1960, 『De La Raison Dialectique, I』Harvard University Press. (竹内 芳郎 矢内原, 伊作訳, 1962, 『弁証法的理性批判 I』人文書院.)
- 佐藤 健二, 2020, 『真木悠介の誕生: 人間解放の比較=歴史社会学』弘文堂.
- 2022, 「テーマ別研究動向 (見田宗介=真木悠介)」『社会学評論』73(3): 262-73.
- 鈴木 敏正, 2022, 「SDGs 時代への「社会システムと人格」— 社会学的振り返りをとおして —」『開発論集』109: 1-47.
- 鈴木 洋仁, 2015, 「作田啓一/見田宗介の初期著作における「価値」」奥村 隆編『作田啓一 vs. 見田宗介』弘文堂, 215-56.
- 竹本 研史, 2014, 「稀少性と余計者: サルトルにおける「集列性」から「集団」へ」『Résonances: レゾナンス: 東京大学大学院総合文化研究科フランス語系学生論文集』8: 19-30.
- 田島 慶吾, 1987, 「社会認識における疎外と物象化」『一橋研究』12(3): 89-105.
- 徳宮 俊貴, 2022, 「見田宗介における社会構想の社会学——人間の可能性の理論」神戸大学 大学院人文学研究科社会動態専攻令和4年度博士論文.
- 内田 義彦, 1966, 『資本論の世界』岩波書店.
- 内田 隆三, 1980, 「< 構造主義> 以後の社会学的課題」『思想』(676): 48.
- 矢守 克也・李 勇昕, 2018, 「「Xがない, YがXです」—疎外論から見た地域活性化戦略—」『実験社会心理学研究』57(2): 117-27.
- 横尾 夏織, 2010, 「「実感」論争と『思想の科学』」『社会学論集』16: 148-63.
- 結城 一郎, 1969, 「現代欲望論--幸福の背理」『別冊中央公論.経営問題』8(3): 278-86.
- 若林 幹夫, 「見田宗介」『日本大百科全書(ニッポニカ)』2024(年 10 月 22 日)